

河伯令嬢

泉鏡花

青空文庫

——心中見た見た、並木の下で

しかも皓齒しらはと前髪で——

北国金沢は、元禄に北枝ほくし、牧童などがあつて、俳諧に縁が浅くない。——つい近頃み覧たのが、文政三年の春。……春とは云つても、あのあたりは冬ふゆごもり籠かごの雪の中で、可心——という俳人が手づくろいに古屏風ふるびょうぶの張替をしようとして——（北枝編——卯辰うたつ集）——が、屏風の下張りに残っていたのを発見して、……およそ百歳ももとせの古いにしえをなつかしむままに、と序して、丁寧ていねいに書きとつた写本がある。

卯辰は、いまも山よりの町の名で、北枝が住んでいた処らしい。

可心の写本によると、奥の細道に、そんな記事は見えないが、

おきな
翁にぞ蚊帳つり草を習ひける

北枝

野田山のふもとを翁にともないて、と前がきしたのが見える。

北方の逸士は、芭蕉を案内して、その金沢の郊外を歩行あるいたのである。また……

丸岡にて翁にわかれ侍りはべし時扇たまに書いて給はる。

もの書いて扇子おうぎへぎ分くる 別わかれかな哉

芭蕉

本人が「給わる」とその集に記したのだから間違いはあるまい。奥の細道では、

もの書かいて扇子ひき引さくなごり哉

である。引裂くなどという景気は旅費の懐都合もあり、元来、翁

の本領ではないらしい……それから、

石山の石より白し秋の霜
芭蕉

なたでら
那谷寺におけるこの句が、

石山の石より白し秋の風

となつている。そうして、同じ那谷に同行した山中温泉の少年
桑之助くめのすけ、あらた新に弟子になつて、とうよう桃妖と称したのに対しての吟ら
しい。

湯のわかれ今宵は肌の寒からむ
芭蕉

おなじく桃妖に与えたものである。芭蕉じいさん……性的に少し怪
しい。……

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ

この句は、芭蕉がしたためたのを見た、と北枝が記しているから、

山中や菊は手折らぬ湯の句ひ

世に知られたのは、後に推敲訂正したものであろう、あるいは猿ざる籠のみを編む頃か。

その猿籠に、

凧たこきれて白嶺しらねヶ嶽たけを行方かな

桃妖

温泉の美少年の句は——北枝の集だと、

糸切れて凧は白嶺を行方かな

になつている。そのいづれか是なるを知らない。が、白山を白嶺と云う……白嶺ヶ嶽と云わないのは事実である。

これは、ただ、その地方に、由来、俳諧の道にたずさわったものの少くない事を言いたいのには過ぎない。……ところが、思いがけず、前記の可心が、この編に顔を出す事になった。

私は——小山夏吉さん。（以下、「さん」を失礼する。俳人ではない。人となりは後に言おうと思う。）と炬燵こたつに一酌して相對した。

「——昨年、能登のとの外浦を、奥へ入ろうと歩ある行きました時、まだほんの入口ですが、羽昨はぐい郡の大笹の宿で、——可心という金沢の俳人の（能登路の記）というのを偶然読みました。

寢床の枕まくらもと頭、袋戸棚にあつたのです。色紙短冊などもある

からちと見るように、と宿の亭主が云つたものですから——」

小山夏吉が話したのである。

「……宿へ着いたのは、まだ日のたかい中うちだったので。下座敷の十畳、次に六畳の離れづくりで、広い縁は、滑るくらい拭ふ込こんでありました。庭前にわさきには、枝ぶりのいい、大な松の樹が一本、で、ちつとも、もの欲しそうに拵こしらえた処がありません。飛々に石を置いた向うは、四ツ目に組んだ竹垣で、垣に青あお薄すすきが生添はえそつて、葉の間から蚕豆そらまめの花が客を珍らしそうに覗のぞく。……ずつと一面の耕地水田で、その遠くにも、近くにも、取りまわした山々の末すそかけて、海と思うあたりまで、一ひとつ蛙が鳴きますばかり、時々この二階から吹くように、峰をおろす風が、庭前にわさきの松こすえの梢

に、颯と鳴って渡るのです。

——今でも覚えていますが、日の暮にも夜分にも、ほとんど人声が聞こえません。足音一つ響かないくらい、それは静なものでした。それで、これが温泉宿……いや鉱泉宿です。一時世の中がラジウムばかりだった頃、憑ものがしたように賑ったのだそうですが、汽車に遠い山入りの辺鄙で、特に和倉の有名なのがある国です。近ごろでは、まあ精々在方の人たちの遊び場所、しかも田植時にかかって、がらんとしていっていると聞いて、かえって望む処と、わざと外浜の海づたいから、二里ばかりも山へ入込んで泊ったのです。別に目立った景色もありません、一筋道の里で、川が、米町川が、村の中を、すぐ宿の前を流れますが、谿河な

がら玉を切るの、水晶を刻むのと、黒い石、青い巖いわを削り添えて
 形容するような流ながれではありません。長さ五間ばかり、こう透すかすと、
 渡る裏へ橋げたまで草の生乱れた土橋から、宿の玄関へ立つたの
 でしたつけ。——（さあ、どうぞ。）が、小手さきの早業で、例
 のスリツパを、ちよいと突直すんじゃない、うちの女房かみさんが、襷たすき
 をはずしながら、土間にある下駄はを穿はいて、こちらへ——と前庭
 を一まわり、地境じぎかいに茱萸ぐみの樹の赤くほつぽつ色づいた下を。そ
 れでも小砂利を敷いた壺つぼの広い中に、縞笹しまざさがきれいらしく、す
 いすいと藷いが伸びて、その真青まつさおな蔭に、昼見る螢の朱の映るの
 は紅羅がんびの花の蕾つぼみです。本屋おもや続きの濡縁ぬ縁に添あつて、小さな杜かきつばた若
 の咲いた姿が、白く光る雲の下に、明あかるく、しつとりと露を切る。

……木戸の釘は錆びついて、抜くと、ちようつがい蝶番が、がったり外れる。一つためなお撓直して、扉を開けるのですから、出会がしらに、水いな鶏でもお辞儀をしそうな、この奥庭に、松風で。……ですから、私は嬉しくなつて、どこを見物しないでも、翌日も一日、ゆつくりとうりゆう逗留の事と思つたのです。

それに、とにかく、大笹鉢泉と看板を上げただけに、湯は透通ります。西の縁づたいに、竹にいしどうろう石燈籠をあしらつた、本屋の土蔵の裏を、ずつと段を下りて行くゆのですが、ひとなっこ人懐い可愛い雀が、ばらばら飛んだり踊つたり、横に人の顔を見たり、その影が、湯の中まで、竹の葉と一所に映るのです。

——夜、寢床に入りますまで、二階屋のうえした上下、客は私一人、

あまり閑静過ぎで寝られませんかから、枕頭へ手を伸ばして……亭主の云つた、袋戸棚を。で、さぞ埃ほこりだらうと思うのが、きちんとしている。上うわづみ包して一束、色紙、短冊。……俳句、歌よりも、一体、何と言いますか、冠かむりづけ、沓くつづけ、狂歌のようなが多い、その中なかに——（能登路の記）——があつたのです。大分古びがついていた。仮綴かりとじの表紙を開けると、題に並べて、（大笹村、川かわすそみようじんん）
裳明神縁起。）としてあります。

川裳明神……

わたしはハツと思いました。」

「——川裳明神縁起。——この紀行中では、人が呼んで、御坊々々と言いますし、可心は坊さんかと、読みながら思いました、そうではない。いかにも、気がつくとその頃の俳諧のしゆぎようじや修行者は、年とし紀にかかわらず頭を丸めていたのです——道理こそ、可心が、大木の松の幽寂に二本、すつくり立つた処で、わかれみち岐路の左みち右に迷って、人ひと少すくなな一軒屋で、孫を抱いた六十余あまりの婆さんに途を聞くと、いきなり奥へ入って、一いちもん錢もって出た……（いやとよ、老女）と、最明寺で書いていますが、報謝に預るのではない、ただ路を聞くのだ、と云うと、魂たまげ消た気の毒な顔をして、くどくどわび詫をいいながら、そのまま、はだし跣足で、雨の中を、びたびた、

二町ばかりも道案内をしてくれた。この老女の志、（現世に利益、未来に冥福あれ、）と手にした数珠を揉んで、別れて帰るその後影を拝んだという……宗匠と、行脚の坊さんと、容子がそつくりだった事も分りますし、跣足で路しるべをしたお婆さんの志、その後姿も、尊いほどに偲ばれます。——折からのざんざ降で、一人旅の山道に、雨宿りをする蔭もない。……ただ松の下で、行李を解いて、雨合羽を引絡ううちも、袖を絞ったというのですが。——これは、可心法師が、末森の古戦場——今浜から、所口（七尾）を目的に、高畑をさして行く途中です。

何でもその頃は、芭蕉の流れを汲むものが、奥の細道を辿るの
は、エルサレムの宮殿、近代の学者たちの洋行で、奥州めぐりを

濟まさないと、一人前の宗匠とは言われない。加賀近国では、よし、それまでになくても、内外能登の浦づたいをしなないと、幅が利かなかつたらしいのです。今からだと夢のようです。

はじめ、河北潟かほくがたを渡つて——可心は、あの湖を舟で渡つた。

——高松で一夜宿いちやどまり、国境になりますな。それから末松の方へ、

能登浦、第一歩の草鞋わらじを踏むと、すぐその浜に、北海へそそ灌ぐ川尻

が三筋あつて、渡船がない。橋はもとよりで、土地のものは瀬に馴なれて、勘わたで渉わたるから埒らちが明く。勿論、深くはない、が底おひたに夥おびた多だしく藻が茂つて、これに足を搦からまれて時々旅人が溺おぼれるので。

——可心は馬を雇つて、びくびくもので渉わたつたが、その第三の川は、最も海に近いだけに、ゆるい流ながれも、押し寄せる荒海の波と相

争つて、煽あおられ、揉もまるる水草は、たちまち、馬腹に怪しき雲の湧わくありさま。幾万条すじともなき、青い炎、黒い蛇が、旧曆五月、白い日の、川波さかさまに倒たふに映つて、鞍くらも人も呑のもうとする。笠被きた馬士ごが轡くつわ頭あたまをしつかと取つて、（やあ、黒よ、観音様念じるだ。しつかりよ。）と云うのを聞いて、雲を漕こぐ櫂かいかと危あやぶむ竹たけ杖づえを宙に取つて、真まう俯つぷし伏ふしになつて、思わずお題目をとなえたと書いています。

旅行は、どうして、楽なものではなかつたのです。可心にとつて、能登路のこの第一歩あぶなの危なつかし懼かしさが、……——実は識しんをなす事になるんです。」

と言つて、小山夏吉は一息した。

「やがて道端の茶店へ休むと——薄曇りの雲を浴びて背戸の映山紅じまつかが真紅まつかだった。つい一句を認したためて、もの優しい茶屋の女房に差出すと、渋茶をくんで飲んでいる馬士まごが、俺おらがにも是非いちめえ一枚で、……その短冊をやたらに幾度も頂いた。（おかし。）と云つて、宗匠ちよつと得意ですよ。——道中がちと前後しました。——可心法師は、それから徒歩かちで、二本松で雨に悩み、途みちに迷い、情なさけあるお婆さんに導かれて後のち、とぼとぼと高畑まで辿たどり着く。その夜、旅のお侍と俳談をする処があります。翌日は快晴。しかし昨日きのう、道に迷った難儀に懲りて、宿から、すぐ馬を雇つて出ると、曳出ひきだした時は、五十四五の親仁おやしが手綱を取つて、十二三の小僧が鞍くら傍わきについていた。寂しい道だし、一人でも連つれは難ありがた有いと喜

んだのに、宿はずれの並木へ掛かると、奴やつこが綱なわに代つて、親仁は脚く

わえぎせる

煙管えんくわんで、うしろ手を組んで、てくりてくりと澄すみまして帰る。：

：前後に人脚はまるでなし。……（これ、兄や、こなた馬は曳ひけ

るかの、大丈夫じやろうかの。私わしは初旅はつりょじや。その上馬じやうばに乗るも

今度こんどがはじめてじや。それにの、耳みみはよう聞えずの。……頼たのんだ

ぞ。）いかにも心細こころそうです。読んでいて段々だんだん分りましたが、筆

談だんでないと通とじないほどでもないが、余程うしろ耳みみが疎うといらしい。……

あるいはそんな事で、世捨人よすけ同様に、——俳諧はいかいはそのせめてもの

心遣こころりだったのかも知れませんが、勿論もちろん、独身ひとりらしいのです。寸す

人ひと豆馬まめうまと言いいますが、豆まめほどの小僧こぞうと、馬うまに木茸きくらげの坊ぼうさん一

人ひと。これが秋の暮くれだと、一里塚いちりづかで消えちまいます、五月ごがつの陽かげ炎ろう

を乗って行きます。

お婆さんが道祖神さえのかみの化身なら、この子供には、こんがら童子の憑移のりうつったように、路も馬も涉取りはかど、正午頃には早く所口へ着きました。可心は穴水の大庄屋、林水とか云う俳友を便たよつて行くので。……ここから七里、海上の渡わたしだそうです。

ここの茶店の女房も、（ものやさしく取りはやして）——このやさしくを女扁に、花、※やさし。——という字があててある。……ちよつと今昔の感がありました。——（女ばかりか草さえ菜さえ能登やさしは優やさしや土までも——俗謡の趣はこれなんめり。）と調子が乗って、はやり唄まで記した処は、御坊、ここで一杯きこしめしたかも知れない。……

亭主が、これも、まめまめしく、方々聞合わせてくれたのだけれども、あいにく便船がなく、別仕立の渡船で、御坊一人十匆もんめならばと云う、その時の相場に、辟易へきえきして、一晚泊る事にきめると、居心のいい大きな旅籠はたごを世話しました。（私の大笹の宿という形があります。）その宿に、一人、越中の氷見ひみの若い男の、商用で逗留とうりゆう中、茶の湯の稽古けいこをしているのに、茶をもてなされたと記してあります。商用で逗留中、若い男が茶の湯の稽古——その頃の人氣が思われます。しかし、何だかうら寂しい。

翌日は、巳みの時ばかりに、乗合六人、石動山せきどうざんのお札くぼりの山伏が交つて、二人船頭で、帆を立てました。石崎、和倉、奥の原、舟尾、田鶴浜、白浜を左に、能登島を正面に、このあたりの

佳景いわむ方なし。で、海上左右十町には足りまいと思ふ、大蛇おろちと称となえる処を過ぎると、今度は可恐おそろしく広い海。……能登島の鼻と、長浦の間、今の三ヶ口みつの瀬戸でしよう。その大海へ出る頃から、（波やや高く、風加わり、忽たちまち霧しづき立つと見れば、船頭たち、驚破すわ白山より下おろすとて、巻落す帆の、軋きしむ音骨を裂く。唯ただ一人おわしたる、いづくの里の女によし性しょうやらむ、髪高等に結いなしして、姿も、いうにやさしきが、いと様子あしく打悩み、白芥子しらげしの一重ひとえの散らむず風情。……

むかし義経卿をはじめ、十三人の山伏の、鰐わにの口の安宅あたくをのがれ、俱利伽羅くりからの竜の背を越えて、四十八瀬に日を数えつつ、直江の津のぬしなき舟、朝の嵐ただよに漾たつて、佐渡の島にも留とどまらず、白

山の嶽たけの風の激しさに、能登国珠洲すずヶ岬さきへ吹はなされたまいし時、いま一度陸にうけて、ともかくもなさせ給えとて、北の方かたくな、紅の袴はかまに、唐からのかがみを取添えて、八大竜王に参らせらると、つたえ聞く、その面影も目のあたりま。……とこの趣が書いてあります。

——佐渡にも留めず、吹放つた、それは外海。この紀事の七尾湾ひとても一手の風しぶきに※を飛ばす、靈山の威を思うとともに、いまも吹きしむ思おもがして、——大笹の夜よの宿に、ゾツと寒くなりました。

それだのに搔か巻まを匆はねて、写本を持つたなり、起直つたんです、私は……」

小山夏吉の眉に、陰が翳さした。

「……紀行に、前申した、川裳明神縁起とあるのでしよう。可心

の無事はもとよりですが、ここでこの船に別条が起つて、白芥子しらげしの花が散るのではないか。そのゆうなる姿を、明神に祭つたのではないだろうか、とはつとしました。私の聞き知つた、川裳明神めがみは女神めがみですから。……ところで（船中には、一人坊主を忌むとて、出家一人のみ立交る時は、海神の祟たたりありと聞けば、彼の美女の心、いかばかりか、尚なおその上に傷いたみなむ。坊主には候わず、出家には侍はんべらじ。と、波風のまぎれに声高に申ししが、……船助かりし後あとにては、婦人の妍かおきにつけ、あだ心ありて言いけむように、色めかしくも聞えてあたり恥はずし。）と云うので、木の葉とばかり浮き沈む中で、聾つんぼ同然の可心が、何慰ことばめの言も聞き得ないで、かえつて人の気を安めようと、一人、魚うおのように口を開けて、張つて

(坊主でない、坊主でない。)と喚わめいた様子が可哀あわれに見えます。

穴水の俳友の住居すまいは、千石の邸やしきの構かまで、大分懇ねんごろにもてなされた。

かこい網の見物に(われは坊主頭にはちまき願ねがひして)と、大おおに気競きおう

処ところもあつて——(鯛いわし、鯖さば、鱒あじなどの幾千ともなく水底みずそこを網ひるにがえ

るありさま、夕陽ゆうひに紫の波を翻ひるして、銀の大罏おおるつぼに溶とけるに異

ならず。)——人氣にんぎがよくて魚も沢山いそだつたんでしよう。磯端いそばた

で、日ひくれ方、ちよつと釣つをすると、はちめ(甘鯛あまの子)、阿羅あ

魚う、鰈おが見る見るうちに、……などは羨うらやましい。

七日ばかり居たのです。

これまでは、内浦で、それから半島の真中まんなかを間道越まごえに横切

つて、——輪島街道。あの外浦を加賀へ帰ろうという段取になる

と、路が嶮けわしくつて馬が立たない。駕籠かごは……四本竹に板を渡した
 ほどなのがあるにはある、けれども、田植時で舁かき手がない。：
 ……大庄屋の家の屈強な若いものが、荷物と案内を兼ねて、そこで
 おかしいのは、（遣りきれなくなったら負おぶさりたまえ。）と云う
 俳友の深切です。出発の朝、空模様が悪いのを見て、雨が降つた
 ら途中から必ず引返ひっかえせ、と心づけています。道は余程難儀らし
 い……」

小山夏吉は、炬燵こたつぶとん蒲団を指で辿たどりつつ言った。

三

読者よ、小山夏吉は続けて言う。

「何、私の大笹どまりの旅行なぞ、七尾行の汽車で、羽咋はぐいで下りて、一の宮の気多けた神社に参詣さんけいを済ませましてから、外浦へ出たまでの事ですが、それだって、線路を半道離れますと、車も、馬も、もう思うようには行きません。あれを、柴垣しばがき、狢谷くるみだに、大島、と伝つて、高浜で泊るつもりの処を、鉱泉があると聞いて、大笹へ入ったので。はじめから歩行あるくつもりではありましたが、景色のいい処ほど、道は難渋なんじゆです。

ついでに……その高浜から海岸を安部屋あべやへ行く間に、川があります。海へ灌ぐそそ川尻の処は、私はまだ通らなかつたうちですが、大笹の宿の前を流れる米町川の末になります。現に寢床へさらさ

らと音がします。——その川尻を渡つて、安部屋から、百浦ももうら、
 志加浦しがうら、赤住あかずみ……この赤住を……可心の紀行には赤垣あやまと誤つて
 います——福浦、生神いきがみ、七海ななうみ。それから富来とぎ、増穂ますほ、劍地つるぎじ、
 藤浜、黒島——外浜を段々奥へ、次第に、巖いわは荒く、波はおどろ
 になつて、平たいらは奇に、奇けは峭わしくなるのだそうで。……可心はこの
 黒島へ出たのです、穴水から。間に梨なしの木坂の絶所を越えて門前
 村、総持寺（現今、別院）を通つて黒島へ、——それから今言い
 ました外浜を逆に辿たどつて、——一の宮まいへ詣つて、もとの河北瀉を
 金沢へ帰ろうとしたのです。黒島へ一晩、富来へ二晩、大笹おほざさに近
 い、高浜へ一晩。……ただ、その朝の暴風雨あらしと、米町川ながれの流ながれの末
 が、可心のために、——女神の縁起になりました。

まだ、途中の、梨の木坂を越えるあたりから降出したらしいの
 ですが、さすが引返すでもなかつた。家数四五軒、佗わびしい山間やまあい
 の村で、弁当を使った時、雨を凌しのいで、簀すの子の縁に立掛けた板
 戸に、（この家の裏で鳴いたり時ほととぎす鳥。……）と旅人の楽書らくがき
 があるのを見て、つい矢立を取つて、（このあたり四方八方時鳥、
 可心。）鳴いているらしく思われます。やがて、総持寺に参詣し
 て、（高塔の上やひと声時鳥、可心。）これはちよつとおまけら
 しい。雨の中に、門前の茶店へ休んで、土地の酒さけづくり造の豪家に
 俳友があるのを訪ねようと、様子を聞けば大病だという。式台ま
 で見舞うのもかえつて人ひとさわが騒さわせ、主人に取次もしようなら、遠
 来の客、ただ一泊だけでもと気あつかいをされようと、遠慮して、

道案内を返し、一人、しよぼしよぼ、濡れて出て、黒島道へかかろうとする、横筋の小川の畝あぜをつたつて来て、横ざまに出で会くわした男がある。……大おおき、酒、とかいた番傘をさしていると、紀行の中にあるのです——

一杯、頂きましたよう。

もう一杯。……もう一杯。

息つぎを、というほどの、私の話はなし振ぶりではありませんけれど、私に取って、これからは少々勢いきおいをかりませんと、でないとお話しにくい事がありますから。……」

四

「羽織は着たが、大番傘のその男、足駄穿あしだばきの尻端折しりつぱしよりで、出で会頭あいがしらに、これはと、頬ほお被かぶりを取った顔を見ると、したり、可あ心が金沢で見知越みしりごしの、いま尋ねようとして、見合わせた酒造家の、これは兄あごで、見舞に行つた帰途かえりだといふのです。この男の住居すまいが黒島で、そこへその晩泊りますが、心あての俳友は大病、思いがけないその兄の内へともなわれる……何となく人間の離合集散に、不思議な隠約があるように思われて。——私は宿で、床の上で、しばらく俯向うつむいて、庭の松風を聞いていました。——

可恐おそろしい荒海らしい、削立いつた巖いわが、すすすす見えて、沖は白

波のただ打うち累かさなる、日本海は暗いようです。黒島を立て、劍地、増穂——富来の、これも俳友の家に着いた。むかし、渤海ぼっかいの船が息をついた港だ、と言います。また格別の景色で。……近い処に増穂のあるのは、貝の名から出たのだそうで、浜なぎさの渚は美しい。……

金かない石いわの浜では見られません。桜貝、阿古屋貝あこやがい、撫子貝なでしこがい、貝か寄いよせの風が桃の花はな片はなびらとともに吹くなどという事は、竜宮を疑わないものにも、私ども夢のように思われたもので。

可心も讚嘆しています。半日拾いくらした。これが重荷になつた——故郷ふるさとへ土産に、と書いています。

このあたりに、荒城あらかきの狭屋さやと称とえて、底の知れない断崖きりぎしの巖い

わあな
穴があると云つて、義経の事がまた出ました。

免のがれられない……因縁です。」

小山夏吉は、半ば独言つぶやいて嘆息して、苦にがそうに猪口ちよこを乾ほした手がふるえた。

小山夏吉は寂さびしく微笑ほほえんだ。

「ははは、泣くより笑わらいで。……富来に、判官ほうがんどのが詠じたと言

伝えて、（義経が身のさび刀とぎに来て荒城のさやに入るぞおかしき。）北の方が、竜王の供料にと、紅くれなの袴はかまを沈めた、白山がだ

けの風に、すずの岬ただよへ漂つた時、狭屋へ籠こもつての歌だ、ということです。悪い洒落しやれです。それに、弁慶あわびに鮑あわびを取らせたから、鮑は富

来の名物だ、と言います。多分七つ道具から思いついたものだろう、と可心もこれには弱っている。……

富来を立つ時、荷かつぎを雇うと、すたすた、せかせか、女の癖に、途方もなく足が早い。おくれまいとすると、駆出すばかりで。浜には、榮螺さざえを起す男も見え、鰯いわしを拾う童わらべも居る。……汐しおの松の枝ぶり一つにも杖を留めようとする風流人には、此奴こいつあてつけに意地の悪いほど、とつとつと行く。そうでしょう、駄賃を稼ぐための職業婦人が聾つんぼの坊さんの杖つきのの字に附合つていられる筈はずはない。喘あえぎ喘あえぎ、遣切れなくなつて、二里ばかりで、荷かつぎを断りました。御坊が自分で、荷を背負しよつて、これから註文通り景色を賞ほめ賞ほめ歩ある行き出したは可いが、荷が重い。……弱つ

た、弱った、とまた弱っている。……

福浦のあたりは、浜ひろがりに、石山の下を綺麗な水が流れて、女まじりに里人が能登縮のとちぢみをさらして、その間あいあい々の竈くどからは、塩を焼く煙が靡なびく。小松原には、昼顔の花が一面に咲いて、渚なぎさの浪の千種ちぐさの貝ひるがえに飜ひるがえるのが、彩色した胡蝶ちようちようの群がる風情。何とも言えない、と書いている下から、背負しよい重りのする荷は一歩とあしずつ重量めかたが掛かかる、草臥くたびれはする、汗にはなる。荷かつぎに続いて息せいた時分から、もう咽喉のどの渴のどきに堪えない。……どこか茶店をと思うのに、本街道は、元来、上の石山を切つて通るので、浜際は、もの好ずきが歩ある行くのだから、仕事をしている、布さらし、塩焼に、一杯無心する便宜はありません。いくら俳諧師だといつ

て、昼顔の露は吸えず、切ない息を吐いて、ぐったりした坊さんが、辛うじて……赤住まで来ると、村は山際にあるのですが、藁わらのらふき小家が一つ。伏屋貝ふせやがいかと浜道へこぼれていて、朽ちて崩れた外流そとながしに——見ると、杜若かきつばたの真の瑠璃色るりいろが、濡色に咲いて二三輪。……

可心は、そこを書くための用意だかどうだか、それまでの記事のうちに、一ヶ処も杜若を記していません。

——その癖、ほんの片浦を見ました。私の目にも。——

小山夏吉は、炬燵こたつに居直つて言うのである。

「湖、沼、池の多い土地ですから、菖蒲あやめ杜若かきつばたが到る処に咲いています。——今この襖ふすまへでも、障子へでも、一一ふたすじ条ばかり水の

形を曳ひいて、紫の花をあしらえば、何村、どの里……それで様子がよく分るほどに思うのです。——大笹しゆくの宿へ入つても、中庭の縁に添つて咲いていたと申しましたつけ。

——杜若の花を小棲こづまに、欠かけ鹽だらひで洗濯をしている、束ね髪で、窶やつやつ々しいが、（その姿のゆうにやさしく、色の清げに美しさは、古井戸を且つ蔽おおいし卵うの花の雪をも欺あざむきぬ。……類たぐいなき艶えん色しよく、前さきの日七尾の海の渡船にて見参らせし女にょ性しようにも勝りて）……と云つて……（さるにても、この若き女房、心頑かたくなに、情冷なさく、言わむ方なき邪慳じゃけんにて、）とのつけに遣ツつけたから、読んでいびて吃驚びっくりすると、（茶を一つ給われかし、御無心）と頼んだのに、

(茶屋はあちらに。)

と云つて断つたのです。耳が聞えないんですから、その女は前途へ指さしでもしたらしい。……(いや、われらは城下のものにて、今度、浦々を見物いたし、またこれよりは滝谷の妙成寺へ、参詣をいたすもの、見受け申せば、我等と同じ日蓮宗の御様子なり。戸のお札をさえ見掛けての御難題、坊主に茶一つ恵み給うも功德なるべし、わけて、この通り耳も疎し、独旅の辿々しさもあわれまれよ。)と瘦法師が杖に縋つて、珠数まで揉みながら、ずつと寄ると——ついと退く。……端折つた白脛を、卯の花に、はらはらと消し、真白い手を、衝と掉つて押退けるようにしたのです。芋を石にする似非大師、むか腹を立

つて、洗濯もの黒くなれと、真黒まっくろに呪詛のろつて出た！……

（ああ、われこそは心頑かたくなに、情なく邪慳無道なさせであつたずれ。耳う
ときものの人十倍、心のひがむを、疾やまいなりとて、神にも人にも許
さるべしや。）と追おっつけ、慚愧後悔ざんきをするのです。

能登では、産婦のまだ七十五日を過ぎないものを、（あの姉さ

んは、まだ小屋うちの中、）と言う習慣ならわしのあるくらい、黒島しやくの赤

神じんは赤神様あかがみさまと申して荒神あらがみで、厳きびしく不浄やしろを嫌きらむる。社やしろまわ

りでは産小屋うぶごやを別に立てて、引籠ひきこもる。それまではなくても、浦

浜はま一体にその荒神を恐おそれました。また靈驗れいげんのあらたかさ。可心こころは、

黒島くろしまでうけた御符おふだを、道中安全みちなかあんぜん、と頭陀袋ずだぶくろにささしていた。

とんでもない。……女おんなが洗あらっていたのは、色のついた、うつ木

の雪の一枚だったと言うのです。

振返つて、一ひと睨み。かきつばた杜若の色も、青い虫ほどに小さくな

った、小高い道に、小川がひとすじ一条流れる。板の橋が掛かかつた石段の

上に、廻まわりえん縁のきれいなのが高く見えた。——橋の上に、兄弟

らしい男の子が、二人遊んでいたのも、もしやと心頼みに、茶を

一つ、そのよし頼むと、すぐに石段を駈かけあが上り縁を廻つたと思え

ば、十歳とおばかりの兄の方が、早く薄べりを縁に敷いた。そこへ杖

を飛ばしたそうです。七十ぐらいの柔和なお婆さんが煙草たばこぼん盆を

出してくれて、すぐに煎茶せんちゃを振舞い、しかも、嫁が朝の間拵まごしらえ

たと、小豆あずきあん餡の草団子を馳走した。その風味のよさ、嫁ごとい

うのも、容色きりようも心も奥ゆかしい、と戴いています。が、この嬉

しきにつけても思う、前刻さつきの女の邪慳じゃけんさは、さすがに、離れた土地ではないから、可心も何にも言わなかつた。その事が後に分ります。……この一構ひとつかまえは、村の庄屋で。……端近へは姿も見えぬ、奥深い床の間と、あの砂浜の井戸端と、花は別れて咲きました。が、いずれ菖蒲あやめ、杜若かきつばた。……二人は邑知瀉おうちがたの汀みぎわに、
 一本ふたもとのうつくしい姉きょうだい妹であつたんです。

長話はしたが、何にも知らずに……可心は再び杖を曳ひいて、それから二三町坂を上ると、成程、ちよつとした茶店もあつた。……泊とまりを急いで、……高浜たかひらの宿へ着ききました。

可心はまだ川を渡らない。川を渡る、そこが……すぐ大笹の宿の前を流れて米町川の海に灌そそぐ処なんです。百年前の可心は、い

まその紀行で、——鉾泉宿の真夜中の松を渡る風にさえ、さらさらと私の寢床に近づきました。」

小山夏吉は杯を取った。

「高浜では、可心に相宿がありました。……七歳ななつばかりの男の子を連れた、五十近い親仁おやしで、加賀の金石の港から、その日漁船の便で、海上十六七里——当所まで。これさえ可なり冒険で。これからは浪が荒いから、外浜を徒歩かちで輪島へ行くゆ。この子の姉を尋ねて、と云う。——日曜に、洋服を着た子の手をひいたのでないと、父親の、子をつれた旅は、いずれ遊山ではありません。何となく、貧乏くさい佗わびしいものです。私なども覚おぼえがあります。親仁は問わずがたりに、姉嬢は、輪島で遊女のつとめをする事。この

高浜は、盆前から夏一杯、入船出船で繁昌はんじょうし、一浦ひとつうらが富貴ふつきする。……その頃には、七尾から山越やまごしで。輪島からは海の上を、追立てられ、漕流こぎながされて、出稼つとめぎの売色うれさかに出る事。中にも船で漂うのは、あわれに悲かなしく、浅ましい……身からだの丈夫うれさかで売盛うれさかるものにはない、弱い女が流される。(姉めも、病身つづぶじやによつて、)と蜘蛛くもの巣だらけの煤すすけ行燈あんどんにしよんぼりして、突伏つつぶして居睡いねむる小児こどもの蚊を追いながら、打語る。……と御坊は縁起で云うのですが。

——場所と言ひ、境遇と言ひ、それがそのまま、私の、恋の、お優さんの——」

小山夏吉は肩を落して、両手を炬燵こたつにさし入れた。

「電燈が暗くなつたようです。……目のせいかわりません。何ですか、小さな紫が、電燈のまわりをちらちらします。

大雨大風になりました。

可心が、翌日、朝がけに志す、滝谷の妙成寺は、そこからわずか二里足らずですが、間道にかかるといふ。例の荷はあり、宵の間に荷かつぎを頼んで置いたが、この暴風雨あらしでは出立出来ようかと、寝られない夢に悩んだ。風は、いよいよ強い、しかし雨は小降になつて、朝飯の時、もう人足が来て待つていと、宿で言うので。

杖と並んで、草鞋わらじを穿はく時、さきへ宿のものの運たんだ桐油包とうゆづつみの荷を、早く背負しよつて、髪を引きしめた手拭てぬぐいを取つて、颯さつと唼まぶたを染めて、すくむかと思うほど、内端うちわにおじぎをした婦おんなを見ると、継はぎの足袋に草鞋ばかり、白々とした脛はぎばかり、袖に杜かきつばた若若の影もささぎず、着流した蓑みのに卯うの花の雪はこぼれないが、見紛みまがうものですか。引束ねた黒髪には、雨のまま水も垂りそうな……昨日きのうの邪慳じゃけんな女です。

御坊は、たちまち、むつとして——突立つたつて、すたすた出ました。

ここが情なさけない。聾つんぼの僻ひがみで、昨日悩なやまされた、はじめの足疾あしばやな女に対するむか腹立も、かれこれ一いっ斉ときに打撞ぶつつて、何を……

天気は悪し、名所の見どころもないのだから、とつとつ、すたすた、つんつん聾が先へ立つて。合羽かっぱを吹きなぐりに、大跨おおまたに踏ふ出みだした。

——ああ、坊さんの仏頂面が、こつちを向いて歩行あるいて来ます。

小山夏吉は串じょうだん戯あいてらしいが、深く、眉ひそを顰ひそめたのである。

「従つて、対手あいてを不機嫌にした、自分を知つて、偶然にその人に雇われて賃錢を取る辛さは、蓑もあら蓑の、毛が針となつて肉を刺す。……撫なで肩がたに重荷なでに背負つて加賀笠を片手に、うなだれて行く細ほっそり白えりい頸あし脚ありも、歴あり然あり目に見えて、可傷いた々々しい。

声を掛けて、呼掛けて、しかも聾おおきに、大おんな声で、婦んなの口から言

訳の出来る事らしくは思われない。……吹降ふきふりですから、御坊の頭陀袋ずだぶくろに、今朝は、赤神しゃくじんの形像すがたの顛あらかわれていなかった事は、無論です。

家並を二町ほど離れて来ると、前に十一二間幅の川が、一天地押包いわやまんだ巖山いわやまの懐から海そそへ灌いでいる。……

(翌日、私が川裳明神まいへ詣ろうとして、大笹しゆくの宿の土橋を渡ろうと、渡りかけて、足がすくみました。そこは、おなじ米町川の上流なんですから。――)

その海へ落口おちぐちが、どっと濁なって、流ながれが留とどまった。一方、海か

らは荒浪がどんどんと打ッつける。ちょうどその相激する処に、砂山の白いのが築洲つきすのようになって、向う岸へ架かつたのです。白砂だから濡れても白い。……鵲かささぎの橋とも、白瑪瑙しろめのうの欄干とも、風の凄すさまじく、真水と潮の戦う中に、夢見たような、——これは可お恐そろしい誘惑でした。

暴風雨あらしのために、一夜に出来た砂堤すなどてなんです。お断りするまでもありませんが、打って寄せる浪の力で砂を築つき上げる、川も増水の勢いきおいで、砂を流し流し、浪に堰せかれて、相あいさ逆からってそこに砂を装もり上げる。能登には地勢上、これで出来た、大沼小沼が、海岸にはいくともありません。——河北潟も同おなじ一でしょう。がそれは千年！ 五百年、五十年、日月の築いた一種の橋立です。

いきなり渡つて堪るものですか。

つんぽ 聾ひがみの向腹立が、何おのれで、渡をききも、尋ねもせず、

あしばや 足疾にずかずかと踏掛けて、二三間ひよこひよこ発奮んで

伝わったと思うと、左の足が、ずぶずぶと砂に潜った。あつと抜

くと、右の方がざくりと潜る。わあと きに く、檜木笠を、

高浪が横なぐりに撲りつけて、ヒイと引く息に潮を浴びせた。

杖は徒に空に震えて、細い塔婆が倒れそうです。白い手がその

杖にかかる、川の方へぐいと曳き、瘦法師の手首を取った救

の情に、足は抜けた。が、御坊はもう腰を切つて、踏立てない。

……魔の沼へ落込むのに怯えたから、尻を餅について、草鞋をば

ちやばちやと、蠅の脚で匆^はねる所へ、浪が、浪が、どぶん――

「お助け。――」

波がどぶん。

目も口も鼻も一^{いつ}時^{とき}にまた汐^{しお}を嘗^なめた。

「お助け――」

濤^{なみ}がどぶん。

「お助け――」

耳は聾^{ろう}だ。

「助けてくれ――」

川の方へ、引こう引こうとしていた、そのうつくしい女の、優^{やさし}
い眉^{まゆ}が屹^{きつ}としまると、蓑^{みの}を入れちがいに砂^{すな}堤^{どて}に乗って、海の方

から御坊の背中を力一杯どんとお圧した。ずるずると、可心は川の方へずりお摺落ちて、丘の途中で留まった。この分なら、川へ落ちたつて水を飲むまでで生命いのちには別条はないのに。ああ、入替つた、うつくしい人の雪なす足は、たちまち砂へ深く埋うまつたんです。：

…
 吻ほっと一息つく間もない、吹煽ふきあおらるる北海の荒浪が、どーん、どーんと、ただ一ひとつ処ところのごとく打上げる。…：歌麿の絵の蚕あまでも、かくのごとくんば溺おぼれます。二打ち三打ち、頰くずるる潮の黒髪を洗うたびに、顔の色が、しだいに蒼白そうはくにあせて、いまかえつて雲を破つた朝日の光に、濡蓑は、颯さつと朱鷺色ときいろに薄く燃えながら——昨日坊きのうさんを払つたように、目口に灌そそぐ浪を払い払いする手

が、乱れた乳のあたりに萎なえなえ々々となると、ひとつ寝の枕に、つんと拗すねたように、砂ふすまの衾ふすまに肩をかえて、包みたそうに蓑の片袖を横顔に衝つと引いた姿なり態なりで、羽衣の翼は折れたんです。

可心は、川の方の砂すな堤どての腹にへばりついて、美しい人の棄すてた小笠すだぶくろを頭陀袋ずだぶくろの胸に敷き、おのが檜木笠ほんのくぼを頸くぼ窪くぼにへし潰つぶして、手足を張り縋すがつたまま、ただあれあれ、あつと云う間まだつた、と言うのです。

——三年経たつて、顔がん色しよくは憔悴しょうすいし、形容は脱落した、今度はまったくの墨染の鬮坊主が、金沢の町人たちに送られながら、新しい筵むしろの縦に長い、箱包しよを背負しよつて、高浜へ入つて来ました。

……川かわぐち口に船を揃えて出迎えた人数の中には、穴水の大庄屋、

林水。黒島の正右衛門。……病気が治つて、その弟の正之助。その他、俳友知縁こしぞが挙げたのです。可心法師の大願によつて、当時、北国の名工が丹精をぬきこんでた、それが明神の神像でした。美しい人の面影です。——

村へ、はじめて女神像じょしんぞうを据えたのは、あの草団子のまわり縁

で。……その家の吉之助あねというのの女房、すなわち女神の妹は、勿論、姉が遭難の時、真まさきに跣足はだしで駈かけつけたそうですが、

(あれ、あれ、お祝の口紅を。身からだがきれいになつて。)

と、云つて泣いたそうです。

姉が日雇に雇われるとは知らなかった。……中たがいをしたの

でも何でも無い。選んだ夫の貧しい境遇に、安処して、妹の嫁入さきから所帯の補助たすけがえんは肯じなかつた。あの時、——橋で中よく遊んでいた男おとこのこ子たち、かえつて、その弟の方が、姉あねさんの子だつたそうです。

この妹が、凜りんとしていた。土地の便宜上、米町川の上流、大笹に地を選んで、とにかく、在家を土蔵ぐるみ、白壁づくり、に、仮屋を合せて、女神像をそこへ祭つて、可心は一生堂守で身を終る覚悟であつた処。……

（お心はお察し申しますが、一つ棟にお住いの事は、姉がどう思つか、分りかねます。御僧あなたをお好き申して助けましたか。可厭いやで助けましたか。私には分りませんから。）

妹がきつぱり云った。

可心は、ワツと声を上げて泣いたそうです。

そこで、可心一代は、ずツと川下へ庵いおりを結んで、そこから、朝夕、堂に通つて、かきずいて果てた、と言います。

この庵のあとはありません。

時に不思議な縁で、その妹の子が、十七の年、川尻で——同じ場所です——釣をしていて、不意に波さざに浚さらわれました。泳およぎは出来

たが、川水の落口で、激浪に揉もまれて、まさおほに溺おぼれようとした時、

大おおきな魚に抱かれたと思つて、浅瀬はねだへ芻はねだ出されて助かつた。その時、

艶えんれい麗、竜女のごとき、おぼさんの姿を幻みに視たために、大笹の

可心寺へ駈かけこ込んで出家した。これが二代の堂守です。ところが、

さいわい、なお子があつたのに、世を譲つて、あの妹も、おなじ寺へ籠つて、やがて世を捨てました。

川裳明神の像は、浪を開いた大魚に乗つた立像だそうです。

寺は日蓮宗です。ですが、女神の供物は精進ではない。その折みのの蓑みのにちなんだのが、ばらみの、横みの、鬢びんみの、髻かもじの類、活毛いきげさえまじつて、女が備える、黒髪が取りつつんで凄すげいようです。

船、錨ともづな——纜ともづながそのまま竜の形になつたのなど、絵馬が掛かつていて、中にも多いのは、むかしの燈台、大ハイカラな燈明台のも交っています。

——これは、翌日、大笹の宿で、主人あるじを呼んで、それから聞いた事のちをある処は補いましたし、……後のちとはいわず、私が見た事も

交りました。」……

五

「……この女神めがみの信仰は、いつ頃か、北国に大分流布して、……越前の方はどうか知りませんが、加賀越中には、処々法華宗の寺に祭ってあります。いずれも端麗な女体です。

多くは、川裳かわすそを、すぐに獺かわうそにして、河の神だとも思っていて、——実は、私が、むしろその方だったのです。——恐縮しなければなりません。

魔女だと言う。——実は私の魂のあり所だと言う、……加賀、

かないわ
 金石街道の並木にあります叢祠ほころの像すがたなどは、この女神が、真夏の月夜に、近いあたりの瓜うり畠ばたけ——甜瓜まくわのです——露の畠へ、十七ばかりの綺麗な娘で涼みに出なすつた。それを、村のあぶれものの悪少わるもの狡児ねこ六人というのがやにわに瓜番の小屋へ担ぎあげて無礼をした、——三年と経たたず六人とも、ばたばたと死んだために、懺悔ざんげ滅罪めつざい拔苦はつこ功德こんどくのためとして、小さな石地藏いしじぞうが六体、……ちようど、義経よしつねの——北国おち落おちの時、足弱あしじやくの卿きやうの君きみが後おくれたのを、のびあがりのびあがりここで待まちつたという——（人待石ひとまちいし）の土手どて下に……」

小山夏吉こやまなきちの顔は暗くろかつた。

「海うみの方ななめを斜ななめに向むかいて立たつています。私はここで、生しょう死じの境さかいの

事を言わねばならなくなりました——一杯下さい……」

炬燵こたつは巖いわのように見えた。

はじめよりして、判官ほんがん殿の北国の浦づたいの探訪のたびに、

色の変るまでだった、夏吉の心が頷うなずかれた。

「——能登路の可心は、僻ひがみで心得違ちがいをしたにしろ、憎いと思

った女の、過あやまつて生命いのちを失つたのにさえ、半生こうげを香華の料に捧げ

ました。……

(——これは縁起に話しましたが——)

私わたしなんぞ、まったく、この身体からだを溝石どぶいしにして、這面しゃつらへ、一ひ

鑿とのみ、目鼻も口も、削りかけの地蔵にして、その六地藏の下座の

端へ、もう一個ひとつ、真桑瓜を横よこかじ嚙かじりにした処を、曝さらしものにされ

て可いのです。——事実、また、瓜を食つて渴命をつないでいるのですから。」

と自棄やけに笑つた。が、酔よもさめ行く、面おもての色とともに澄切つた瞳とますずしく、深く思情おもひを沈うめた裡うちに、高き哲人の風格がある。

ここは渠かれについて言うべき機会らしい。小山夏吉は工人にして、飾かざり職しよくの上手である。金属の彫工、細工人。この業わざは、絵画、

彫刻のごとく、はしけやけき芸術ほど人に知られない。鑄金家、まきえし蒔絵師まきえしなどこそ、且つ世に聞こゆれ。しかも仕事の上では、美術家たちの知らぬはない、小山夏吉は、飾職の名家である。しかも、その細工になる瓜の製作は、ほとんど一種の奇蹟である。

自ら渠かれが嘲あざけつた。

「——瓜を食つて生きている——」

いま芸術を論ずる場合ではないのだから、渠の手腕についてはあえて話すまい。が、その作品のうちで、瓜——まくわうり甜瓜が讚美される。露骨に言えば、しきりに注文され、よく売れる。思うままの地金を使つて、実物のおおき大きさ、姫瓜、烏瓜ぐらいなのから、小さなのは蚕そらまめ豆なるまで、品には、床の置もの、香炉こうろう、香合こうごう、釣香炉、手奩てばこの類たぐい。黄金の無垢むくで、簪かんざしの玉を彫きざんだのもある。地金は多くは銀だが、青銅も、臙しがいち銀も、烏しやくどう金も……真黒まつくろな瓜も面白い。皆、甜瓜まくわを二つに割つて、印籠いんろうづくりの立上り靈妙に、その実みと、蓋ふたとが、すつと風を吸つて、ぴたりと合つて、むくりと一個ひとつ、瓜が据る。肉取ししどり、平象嵌ひらそうがん、毛彫けぼり、浮彫、筋彫、石め、

たがね
 鑿は自由だから、蔓も、葉も、あるいは花もこれに添う。玉の露
 ちりば
 も鏤む。

いずれも打出しもので、中はつぎのなくくりぬきを、表の金質
 に好配して、黄金また銀の薄金を覆輪に取つて、しつくりと張
 るのだが、朱肉入、驕つた印章入、宝玉の手奩にも、また巻煙
 こいれ
 草入にも、使う人の勝手で異議はない。灰皿にも用いよう。が
 ねがわ
 希くば、竜涎、蘆薈、留奇の名香。エメラルド
 りゆうぜん
 緑玉、真珠、紅玉を
 ろかい
 留奇の名香。
 とめき
 留奇の名香。
 エメラルド
 緑玉、真珠、紅玉を
 ルビイ
 紅玉を
 なにがし
 某国——公使の、その一品を贈ものに使つてか
 ひとしな
 一品を贈ものに使つてか
 おくり
 贈ものに使つてか
 ら、相伝えて、外国の註文が少くない。

ただ、ここに不思議な事がある。一度手に入れた顧客、また持
 ぬしが、人づてに、あるいは自分、一度必ず品を返す。——返

して、札を厚うして、蓋ふたと実のいずれか、瓜のうつろの処へ、ただもう一ひとつ鑿がね、何ものにてても、手が欲しいほしと言うのである。ほかの芸術における美術家の見識は知らない。小山夏吉は快くこれを諾して、情景品しなに適し、景に応じ、時々ときの心のままに、水草、藻の花、薄すすきの葉、桔梗ききようの花。鈴虫松虫もちよつと留まろうし、さがに蟹も遊ばせる。あるいは単に署名する。客はいずれも大満足をするのである。

外国へ渡つたのは、フランス 仏蘭西からと、イタリイ 伊太利、それからベルギイ 白耳義とスペイン 西班牙から、公私おのおのその持ぬしから、おなじ事を求めて、一度ずつ瓜を返したのには、小山夏吉も舌をまいて一驚きつを吃したそうである。妙に白耳義ひいきが鼻ひいき根で、西班牙が好すきな男だから、瓜の

うつろへ、一つには蛸を、頸くびの銅あかに色を凝らして、烏しやく金の烏どう
ぼたま羽玉の羽を開き、黄金きんと青金で光の影をぼかした。一つには、銀ぎ
んぞうが象嵌がんの吉丁虫たまむしを、と言つていた。

こう陳列すると、一並べ並べただけでも、工賃作料したたかに
 して、堂々たる玄関構がまえの先生らしいが、そうでない。挙げたのは
 二十幾年かの間の折にふれた作なのである。第一、一家を構えて
 いない。妻子も何も持たぬ。仕事は子がいから仕込まれた、――
 これは名だたる師匠の細工場に籠かごつてして、懐ふところ中のある間は諸
 国旅行ばかりして漂泊さすらい歩ある行く。

一向に美術家でない。鋳屋かざりや、鋳職をもつて安んじているのだ
 から、井がまぐちに蝦蟇口つっこを突込んで、印しるし半纏ばんてんで可よさそうな処を、こ

の男にして妙な事には、古背広にゲートルをしめ、草鞋わらじばき穿で、
 鑿たがね、鉄鎚かなづちの幾いくちよう挺ようか、安革鞄やすかばんで斜はすにかけ、どうかするとへ
 ルメツト帽などを頂き、繻子しゆすの大洋傘おおこうもりをつけて山野を渡る。土
 木の小官吏、山林見廻りの役人か、何省やといお傭の技師ぎしという風采ふうさい
 で、お役人あつかいには苦笑するまでも、技師と間違えられると、
 先生、陰気にひそひそと嬉しがって、茶代はぢを発奮はづむ。曰く、技師
 と云える職は、端的に数字ひとに齊ひとしい。世をいつわらざるものだ、
 と信ずるからである、と云うのである。

(——夜話の唯ただいま今なども、玄関くだんの方には件のヘルメツトと、大
 洋傘があるかも知れない。)

が、甜瓜まくわは——「瓜を食って活いきている。」——渠かれの言ことばとともに

に、唐草の炬燵こたつの上に、黄に熟したると、半ば青きと、葉とともに転がった。

六

小山夏吉は更あらためて言ことばを継いだ。――

「あの、金石街道の、――（人待石）に、私は――その一日あるひ、昼と夜と、二度ぐったりとなつて、休みました。八月の半ば、暑さの絶頂で、畠には瓜うりが盛さかんの時ときだったんです。年は十七です。

昼の時は、まだ私わたしという少年こどもも、その生命いのちも日南ひなたで、暑さに苦しい中に、陽気も元気もありました。身の上の事について、金石

に他家よその部屋借をして、避暑かたがた勉強をしている、小学校から兄弟のように仲よくした年上の友だちに相談をして行つたんですから。あるいは希望のぞみが達しられるかも知れないと思つたので。

つまり、友だちが暑中休暇後に上京する——貧乏な大学生で——その旅費の幾分を割さいて、一所に連れて出てもらいたかつたので。……

——父のなくなつた翌あくるとし年、祖母と二人、その日の糧くらしにも困んでいた折から。

何、ところが、大学生も、御多分に洩もれず、窮迫きうぱくしていて、暑中休暇は、いい間まの体裁。東京の下宿げしゆくに居るより、故郷の海岸で自炊じしゆをした方が一夏だけでも幾いく干くらか蹴け出だせようという苦しがりで、

とても相談の成立ちっこはありません。友だちは自炊をしている
 ……だから、茄子なすびを煮て晩飯を食わしてくれたんですが、いや、
 下地が黒い処へ、海水で色揚げをしたから、その色といったら茄
 子のようで、ですから、これだつて身の皮を剥はいでくれたほどの
 深切です。何しろ、ひどい空腹すきはらの処へ、素的うまに旨味さうだから、
 ふうふう蒸気いきの上る処を、ががつして、加減なしに、突いきなり然なり頬
 張ると、アチチも何も無い、吐出せばまだ可いのに、渴かつえている
 ので、ほとんど本能いきおいの勢いきおい、といった工合ぐあいで、吞込くみこむと、焼火箸やけひばし
 を突込つっこむように、咽喉のどを貫くいて、ぐいぐいと胃壁を刺して下つて
 行く。……打倒ぶったおれました。息も吐つけません。きりきりと腹はらが疼いた
たみだ 出して止りません。友だちが、笑いながら、心配して、冷飯を

粥に煮てくれました。けれども、それも、もう通らない。……酷ひどい目に逢いました。

横よこ腹つばら

を抱えて、しよんぼりと家へ帰るのに、送つて来た友

だちと別れてから、町はずれで、卵塔場の破やれがき垣の竹を拾つて、

松並木を——少年こどもでも、こうなると、杖に縋すがらないと歩行あるけませ

ん。きりきり激しく疼いたみます。松によつかかたり、薄すすきの根へ踞しゃが

んだり……杖を力にして、その（人待石）の処へ来て、堪たまらなく

なつて、どたりと腰を落しました。幹が横おおきに、大く枝を張つた、

一里塚のような松の古木の下に、いい月夜でしたが、松葉ほどの

色いろつや艶わらもない、藁わらすべ同然になつて休みました。ああ、そこいら

に落散わらじっている馬の草鞋の方が、余程いきおい勢いきがよく見えます。

道を挟はさんで、入口に清水の湧わく、藤棚の架かつた茶店があつて、

(六地藏は、後に直ぐその傍わきに立つたのですが、)——低く草の

蔭ビイドロに硝子の簾すだれが透たいて、二つ三つ藍色あいいろの浪を描かいた提灯ちようちん

が点ともれて、賑にぎやかなような、陰気なような、化けるような、時々高

笑かわらいをする村の若衆わかいしゆの声もしていたのが、やがて、寂然ひっそり

として、月ばかり、田畑が薄く光つて来ました。

あとまだ一里余あまり、この身体からだを引摺ひきずつて歸つた処で、井戸の水さ

え近頃は濁つて悪臭くさし……七十を越えた祖母ぼあさんが、血を吸う蚊

の中に蚊帳もなしに倒れて、と思うと、疼む腹から絞るようにひ

とりでに涙が出て、人影もないから、しくしくと両手を顔にあて

て泣いていました。

(どうなすつたの。)

花の咲くのに音はしません。……いつの間にか、つい耳許みみもとに、
若い、やさしい声が聞こえて、

(お腹なかが疼いたいんですか。)

少年こどもたち、病氣を見舞うのに、別に、ほかに言葉はないので：

：こう云つてくれたのを、夢か、と顔を上げて見ると、浅葱あさぎの切きれ
で、結綿ゆいわたに結つた、すずしい、色の白い……私とおなじ年とし紀きご

ろの、ああ、それも夢のような——この日、午後四時頃のまだ日ひ

盛ざかりに——往ゆきにここで休んだ時——一足おかれて、金沢の城下

の方から、女たち七人ばかりを、頭痛膏ずつうこうを貼はつた邪慳じゃけんらしい

大年増と、でつくり肥ふとつた膏親爺あぶらおやじと、軽薄けいはくらしい若いものと、

誰が見ても、人買が買出した様子なのが、この炎天だから、白鷺はくがも鴨かもも、豚も羊も、一度水を打つて、活いきをよくし、ここの清水で、息を継がせて、更に港へ追立てた……

……更に追つて行く。その時、金石の海から、河北潟へ、瞬く間に立蔽たちおほう、黒漆こくしつの屏風びょうぶ一枚、電いなびかり光を開いて、風に流す竜巻たつまきが馳掛はせかけた、その余波なごりが、松並木へも、大粒な雨と諸もろともに、ばらばらと、鮒ふな、沙魚はぜなどを降らせました。

竜巻がまだ真暗まつくらな、雲の下へ、浴衣の袖、裾、消々きえぎえに、冥めい土いどのように追立てられる女たちの、これはひとり、白鷺しらさぎの雛ひなかとも見紛みまごうた、世にも美しい娘なんです。」

彫玉の技師は一息した。

「……出稼でかせぎの娼妓しょうぎの一群ひとむれが竜巻の下に松並木を追われて行く。……これだけの事は、今までにも、話した事がありましたから、一度、もう、……貴下あなたの耳に入れたかも知れません。」

君待て、仏国のわけしりが言ったと聞く。

「再びする談話を、快く聞く彼かの女には、

汝なんじ、愛されたるなり。」

筆者は、別の意味だが、同じ心で聞入った。……

「朝顔かんざしの簪かんざしをさしていました。——

（——病氣じゃないんです。僕はもう駄目なんです、死にたいんです。）

事実、そのやさしい、恍惚うっとりした、そして、弱々うがちしい中に、目

もとの凜りんとした顔を見ると、腹の疼いたいのは忘れましたが。

(まあ。)

娘は熟じっと顔を見ました。

(私も死にたいの。)

竜巻のために、港を出る汽船に故障が出来た。——(前刻さつき友だ

ちと浜へ出て見た、そういえば、沖合一里ばかりの処に、黒い波

に泡沫あぶくを立てて、鮫さめが腹を赤く出していた、小さな汽船がそれな

んです。)——日暮方の出帆が出来なくなつた。雑用宿ぞうようの費ついでに、

不機嫌な旦那に、按摩あんまをさせられたり、煽あおがせられたり。濁つた

生簀いけすの、茶色の蚊帳で揉もまれて寝たが、もう一度、うまれた家の

影が見たさに、忍んでここまで来たのだ、と言います。

弥生やよいの頃は、金石街道のこの判官石ほんがんいしの処から、ここばかりから、ほとんど仙境のように、桃色の雲、一刷ひとはけ、桜のたなびくのが見えると、土地で言います。——町のその山の手が、娘のうまれた場所なのです。

（私は、うちにお父さんと、お爺じいさんが。）

（僕は祖母おばあさん一人……）

（死んで、あの、幽霊になって、お手つだいした方が、……ええ、その方がましだと思つてよ。）

（ほんとうです。死んだ方が可い。）

娘は、紅麻べにあさの肌襦袢はだじゆばんの袖なしで、ほんの手拭てぬぐいで包んだ容よ子うすに、雪のような胸をふつくりさして、浴衣の肌を脱いで、袖を

緋ひの扱しり帯ぎに挟はんでいました。急いいで来来て暑あつかつたんでしよう。破や蚊帳れがやから抜は出したので、帯おびもしめない。その緋鹿ひかの子この扱しり帯ぎが、白鷺なまちに鮮血あまの流ながれるようです。

(こんなにして死ぬと……検死の時、まるで裸はだかにされるんですつて——)

(可厭いやだなあ。)

(手てだの足あしだの、引ひくりかえされるんですつて。……この石いしの上うへでしようか、草くさの中なかでしようか。私わたし、お湯ゆに入るいるのも極きまりが悪わるかった。——でも、そうやって検死けんじされるのを、死しねば……あの、空そらから、お振袖ふりそでを着きて見みているから可いいわ。私わたしお裁縫しごとが少すくし出来できます、貴方あなたにも、ちゃんちゃんと衣服きものを着きせませすよ、お袴はかまもはかせまし

ようね。)

私は一刻も早く、速に死にたくなつた。

その扱帯を托つて——娘が、一結び輪にしたのを、引絞りながら、松の幹をよじ上つた勢のよさといつたら。……それでも、往還の路へ向かない、瓜島の方の太い枝へ、真中へ掛けて、両方へ、幻の袖のような輪を垂らした。つづく下枝の節の処へ、構わない、足が重るまでも一所に踏掛けて、人形の首を、藁苞にさして、打交えた形に、両方から覗いて、咽喉に嵌めて、同時に踏はずして、ぶらんこに釣下ろうという謀反でしてなあ。

用意が出来て、一旦ずり下りて、それから誘つて、こう、斜の大な幹ですから、私が先へ、順に上へ這つたのですが、結綿の

島田へ、べつたりと男の足を継いだようであつた。娘の方も、華き奢やしやな、柔やわらかい肩を押上げて、それだと、爪つめさきがまだ、石の上を離れないで、勝手が悪い。

そこで、極きめた足場、枝の節へ立てるまで、娘をおぶ負う事になりました。

一度、向合つた。

(まだ、名を知らない。)

(私、ゆう。)

(ゆう、勇。)

(あら、可哀相に、おてんばじゃありません。にんべんイの。)

(……ああ、お優さん。)

(はい。)

(僕は、夏吉。)

(あれ、いいお名——御紋もんつき着も、紹ろが似合うでしょうね。)

お優さんは、肌襦袢くくを括くくつた細い紐ひもで、腰をしめて、

(汗があつてよ、……堪忍ね。)

襟を、合わせたんですが、その時、夕顔の大輪の白い花を、二つうつむけに、ちらちらと月の光が透きました。乳の下を、乳の下を。

(や、おおきあり大な蟻ありが。)

(あれ、ほくろ黒子ほくろよ。)

月影に、色が桃色の珊瑚さんごになった。

膝を極めて、——起身の娘に肩を貸す、この意気、紺こんがすり 緋ひおとしも
 緋ひおとし 緋ひおとしで、神のごとき名将には、勿体ないようですが、北の方をかた
 引ひっかか抱いえた勢いきおいは可よかった、が、いかに思つても、十七の娘を負おぶつ
 て木登りをした経験は、誰方どなたもおありになりますまい。松の上へ
 ……登れたかつて? ……飛んでもない。ちよつと這はつて上れそう
 でも、なかなか腰が伸のせません。二度も三度も折おり重かさなつて、摺ず
 り落ちて、しまいには、私がどしんと尻餅つを搗くと、お優さんは
 肩すがに縋すがつた手を萎なえたように解いて、色つつぽくはだけた褌つまと、男
 の空脛からすねが二本、少し離れて、名所の石ひしやに挫ひげました。
 溜息ためいき吐ついてる、草しげみの茂しげみを、ばさり、がさがさと、つい、そこ
 に黒く湧わいて、月夜に何だか薄く動く。あ、とお優さんは、媚なまめか

しい色を乱して裾すそを縮めました。おや、鼯鼠もぐらか、田鼠たねずみか。――
透かして見ると、ぴちぴち芴はねるのが尾のようで……とにかく、
長くないのだから、安心して、引ひッつかまえると、

(お魚よ、お魚よ。)

ふな
(鮒ふなのようだ。)

てのひら
掌てのひらには、余るくらいなのが、しかも鰓えら、鰭ひれ、一面に泥まみれで、
あの、菖蒲しょうぶの根が魚になつたという話にそっくりです。

これで首くくりは見合せて、二人とも生きる事になりました。
ちよつと、おめでたい。

両方で瞳めを寄せるうちに、松の根を草がくれの、並木下の小こなが
流れから芴はねだ出したものではない。昼間、竜巻の時、魚が降つた、

あの中の一尾ひびきで、河北瀉から巻落されたに違いない。昼から今に到るまで、雲から落ちながらさえ、魚うおは生命いのちを保つ。そうしてこの水音をしたって、路の向うから千里百里の思おもいをして、砂を分けて来たのであろう。それまでにして魚うおさえ活いきる。……ここは魚売が浜から城下へ往來ゆききをしますから、それが落したのかも分りませんが、思う存分の方へ引きつけて、お優さんも、おなじ意見で、早速、草を分けて、水へ入れてやりました。が、天から降った、それほどの逸物いちもつだから、竜の性を帯びたらしい、非常いきおいな勢いきおいで水を刎はねると、葉うらに留まった、秋近い蛍の驚いて、はらはらと飛ぶ光に、鱗うろこがきらきらと青く光りました。

（食べれば可かったなあ、彼奴あいつ。——ああ、お腹が空いて動くこ

とも出来ない。僕は——)

(まあ、可哀相に、あんなに苦勞したお魚を……)

その癖、冷い汗が流れるほど、腹が空いて、へとへとだと、お優さんも言うんでしよう。……

父は——同じかざりしよく 鋸 職 だつたんですが、盛さかんな時分、二三人居た

弟子のうちに、どこか村の夜祭に行つて、いい月夜に、広々とした畑あるを歩行あるいて、あちらにも茅屋かやが一つ、こちらにも茅屋が一つ。

その屋根に狐が居たとか、遠くで砧きぬたが聞えたとか。つまり畑へ入

つて瓜を盗んで食ううちに、あたり一面の水になつて、膝まで来て、胴すっぱだかへついて、素 裸 になつて、衣きものを背負しよつて、どうと

か……つて、話をするのを、小児こどもの時、うとうと寝ながら聞いて、面白たまくつて堪たまらない。あの話を——と云つて、よくその職人にねだつたものです。

ただ悪いたずら戯うれしにさえ嬉うれしい処しを、うしろに瓜畑うりばたけがあります。——路ち近い処しには一個ひとつも生なつていませんから、二人して、ずつと畑を奥へ忍しのぶと、もこもここと月影を吸つて、そこにも、ここにも、銀とも、金とも、紫とも、皆薄青い覆輪して、葉がくれの墨絵もおもしろい。月夜に瓜畑へ入らないではこの形は分りません。いや、お優さんと一所でなくては。——一個ひとつ、掌のひらにのせました。が夜露よるうで、ひやりとして、玉の脊くつ、珊瑚さんごの枕まくらを据えたようです。雲の形

が葉を拵ひろげて、淡うすく、すいすいと飛ぶ螢は、瓜の筋に銀象嵌ぎんそうがんをするのです。この瓜に、朝顔の白い花がぱつと咲いた……結綿ゆいわたを重おもそうに、娘も膝たもとに袂たもとを折つて、その上へ一ひとつ顆このせました。いきなり齒を当てると、むし齒になると不可いけないと、私のために簪かんざしの柄を刺して、それから、皮を取つて、裂目を入れて、両ふたつに分けて、とろとろと唇が触つたか、触らない中に――

いまの鰻鼠もぐら、田鼠たねずみの形を、およそ三百倍したほどな、黒い影が二つ三つ五つ六つ、瓜畑の中へ、むくむくと湧わいて、波を立てて、うねって起きた。

(泥棒。)

(どツ、泥棒。)

と喚わめくや否いなや、狼おおかみのように人立じんりつして、引包ひつつんで飛とびかかった。

(あれえ。)

(阿魔あまつちよは、番小屋ばんこやへかつげ。)

(この野郎。)

(二才にさいめ。)

私は仰向あおむけに撲飛はりとばされた。

(身みもんだえしやがると、棒ぼうしばりにして、俺等おらうちの小便せうべんをしつ

かけるぞ。)

(村むらのお規則きまりだい。)

(堪忍こらえして、堪忍こらえして……)

娘むすめの声こゑは、十二本の足あしの真黒まっくろな可恐おそろしい獣けものの背せに、白しろい手を空そら

にして聞こえました。

瓜番小屋は、ああ、ああ血の池に掛けた、棧敷のように、鉄くろがねが
煙りながら宙に浮く。……知らなかった。——直じき近い処にあつ
たのです。

(きれいな黒子だな、こんな処に、よう。——)

私の目からは血が流れた。瓜は皆真紅まっかになって、葉ごとに黒い
浪打つ中を、体は、ただ地を摺すつて転がった。

心中見た見た、並木の下で、

しかも皓齒しらはと前髪で。……

心中見た、見た、並木の下で、

しかも皓齒……

番小屋の中から、優しく、細い、澄んだ声で、お優さんの、澄まして唄うのが聞こえました。」

小山夏吉は、声が切つて、はらはらと落涙した。

「お聞きになって、どう、お考えなさるでしょう？」

私には、その時、三つだけ、する事がありました。……

首をくくる事、第一。すぐ傍わきの茶店へ放火する、家を焼いて、村のものを驚かす事、第二。第三は飛込んで引縛ひっくくられて小便を、これだけはどうも不可いけない……どいつも私に二ふたヶからさい、村角むらずも力ちかららしいのも交つて、六人居ます。

間に合う、合わないは別として、私は第二の手段を選ぶのが、

後に思うと、娘に対する義務ではなかったかと思うのです。わずかに復讐の意義をかねて。——ええ、火の用意は、と言うんですか？……煙草のために燐寸マツチがありました。それでなくても、黒くなった畑の上に、松の枝に、扱帯しぎきの緋ひの輪が、燃えて動いているんです。そればかりでも家は焼けるのに、卑怯ひきような奴で、放火つけびが出来ない。第一の事を、と松に這寄つた時、お優さんの唄が聞こえましたのは——発狂したのでしようのに——

（——この通りあきらめました。死なないでお帰りなさい——）
そう言ってくれるのだと、身勝手ばかり考えて、

松の根もとに苺いちごが見える、

お前末代わしや一期いちご。……

一期末代添おうとしたに、

松も苺も、もう見えぬ————とまた唄う。

ええ、その苺という紅い実も、火をつけて、火をつけて、とうつくしい、伶俐な娘が教えたのかも知れないのに……耳を塞ぎ、目を瞑って、転んだか、躓いたか、手足は血だらけになって、夜のしらしらあけに、我が家で、バツタリ倒れたんです。

並木で人の死んだ風説はきかない。……

翌月、不意の補助があつて、東京へ出ました。」

（すぐにある技芸学校を出たあとを、あらためて名匠の内弟子に入つたのである。）

「やっと一人だちで故郷へ帰る事が出来て、やがて十年前に、前

申したわけで六地藏があすこへ立つたと聞きました頃には、もう山桜の霞の家も消えている……お優さんの行方は知れません。生いのち命はあつたのでしよう。いずれ追手が掛かつたのでしよう。おなじように、昇かがれて、連れ戻されて、鱗の落ちた魚、毛のあかはだ膚になつた鳥は、下積に船に積まれて、北海の浪に漾たつたのでしよう。けれども、汽車は、越前の三国、敦賀つるが。能登の富来、輪島。越中の氷見、魚津。佐渡。また越後の糸魚川いといがわ、能生のう、直江津——そのどこへ売られたのか、捜しようがなかつたのです。

六人が、六条むすじ、皆赤い蛇に悩まされる、熱の譫言うわごとを叫んだという、その、渠等かれらに懲罰たを給たまわつた姫神を、川裳明神と聞いて、怪しからんことには——前刻さつきも申した事ですが、私も獺かわおそだと思つ

て、その化身にされたのを、お優さんのために、大不平だった。松の枝の緋鹿子ひがのこを、六人して、六条に引裂いて、……畜、畜生めら。腕うでに巻いたり、首に掛けたり、腹巻はまだしも、股ももに結んで弄もてあそびなぞしていやがった。払はらって浄きよめて、あすこの祠ほこらに納めたと聞いてさえ、なぜか、扉を開けようとはしませんでした。赤い蛇を恐れたのではないのです。——私は実は、めぐり合つて、しめ殺されたい。

殺されて、そうして、彼奴等きやつらよりなお醜い瓜かじりの頬ほっかけ地蔵を並べれば可いんです。」

小山夏吉の旅行癖が——諸君によくお分りになったと思う。

「——大笹の宿で、しかも、この、大笹村にある……思いかけず、

その姫神の縁起に逢った。私は、直ぐに先祖の系図を見る真剣さと、うまれぬさきの世の履歴を読む好奇心と、いや、それよりも、恋人にめぐり逢う道しるべの地図を見る心の時めきで、読む手が思わず震えました。

川裳明神の縁起——可心、のぶる述……」

七

「大笹の宿のその夜、可心の能登紀行で、川裳明神の本地が釈然としました。ひざまず跪かなければなりません。私は寝られません。

なぜか、庭の松の樹を、一度見ないでは、どうしても気が済ま

なくなりました。手ぐりつけられるように。……金石街道でお優
さんと死のうとした、並木の松に、形がそつくりに見えて忍耐がまんが
ならないのです。――

勝手は心得ていましたから、雨戸を開けました。庭の松が、た
だ慄然ぞつとするほど、その人待石の松と枝振は同じらしい。が、ど
の枝にも首を縊くくる扱帯しごきは燃えてはおりません。寝そびれた上に、
もうこうなつては、葉がくれに、紅いのがぶら下つていようも知
れないと、跣足はだしでも出る処を、庭下駄があつたんです。

暗夜やみだか、月夜だか、覚えていません。が、松の樹はすやすや
と息を立てて、寝姿かと思う静しずかさで、何だか、足音を立てるのも

氣の毒らしい。三度ばかり、こんもりと高い根を廻りましたが何
 にも見えません。茫然と、腕組をして空を視めて立った、二階
 の棟はずれを覗いて、梟が大きく翼を拡げた形で、またおなじよう
 な松が雲の中に見えるんです。心を曳かれて、うっかりして木戸
 を出しました。土が白い色して、杜若の花、紅羅の苔も、色を
 朧に美しい。茱萸の樹を出ますと、真夜中の川が流れます。紀行
 を思うと、渡るのが危つかしい。生えた草もまた白い。土橋の上
 に、ふと二個向合った白いものが見えました。や、女だ！これ
 は。……いくら田舎娘だって、まだ泳ぐには。——思わず、私が
 立停まると、向合ったのが両方から寄って、橋の真中へ並
 で立ちました。その時莞爾笑ったように見えたんですが、すた

すたと橋を向うへ行く。跣足はだしです。よく見ると、まるの裸体はだか……
 いや、そうでない。あだ白い脚は膝の上、ほとんどつけ根へ露呈あらわ
 なのですが、段々瞳が定まるきると、真紅まっかな紅羅がんぴの花を簪かんざしにして、柳し
 条筐まじさのような斑ふの入った薄い服きもの。——で青いんだの、赤いんだの、
 茱萸ぐみの実が玉のごとく飾つてある。——またしきりに鳴く——蛙
 の皮の疣いぼいぼ々々いぼいぼのようでもありません。そうして、一ひとつとび飛とずつ大おおま
 跨たに歩ある行くのが、何ですか舶来とまごいの踊子が、ホテルで戸惑とまごいをし
 たか、銀座の夜中に迷子まよごになつた様子で。その癖、髪の色は黒い、
 ざらざらと捌はいたおさげらしい。そのぶら下つた毛の中に、両方
 の、目が光る。……ああ、あとびつしやりをする。……そうでな
 いと、目が背中へつくわけがない、と吃驚びっくりしました。しかし一

体、どつちが背だか腹だか、開けた胸も腹も、のつぺらぼうで、人間としての皮の縫目が分りません。

少し上流の方へ伝つて行くと、向う左へ切れた、畝道の出口へ、おなじものが、ふらふらと歩行いて来て、三個になつた。三個が、手足を突張らかして、箸の折れたように、踊るふりで行くと、ばちやばちやと音がして、水からまた一個這上つた。またその前途に、道の両側に踞んで待つたらしいのが、ぽんと二個立つと、六個も揃つて一列になりました。逆に川下へ飛ぶ、ぴかりぴかりと一つ大な螢の灯に、皆脊が低い。もつとも、ずつと遠くなつたのだから、そのわけかも知れませんが、三尺二尺、五寸ぐらいに、川べりの田舎道遙になると、ざあと雨の音がして、流の

片側、真ま暗くらな大おおな竹たけ藪やぶのざわざわと動いて真暗な処で、フツと吸われて消えました。

ほんとうに降つて来た。私は、いつか橋を渡っていたのです。

小雨に、じつとりとなつた、と思つたのは、冷い寝汗で。……

私はハツと目が覚めました。」

八

「翌朝思おもいのほか寝過いごして、朝湯で少しはつきりして、朝飯あさはんを取ります頃は、からりと上天気。もう十時頃で、田舎はのんきで

すから、しらしら明あけもおんなじに、清すがすが々しく、朗かに雀たちが

たかさえずり

高たかさ 嘯えずり で遊んでいます。蛙も鳴きます。旅籠はたごの主人あるじに、可心寺

の聞きたしをして——（女神じよしんは、まったく活いきておいでなさる。

幽寂しんとした時、ふと御堂みどうの中で、チリンと、幽かすかな音ねのするのは、

簪かんざしが揺れるので、その時は髪かみを撫なでつけなさるのだそうで。）と

聞く時分から、テケテケテン、テトドンドンと、村のどこかで：

：遠とほい小学校こどもの小児もろごえの諸声しずかに交まじつて、静しずかに冴さえて、松葉とびが飛と歩び

行あるくような太神楽だいかぐらの声こゑが聞きえて、それが、笥こたまに響こきました。

おお！ ここに居ゐる。——流ながれに添そつて、上かみの方かたへ三町さんばかり、

商あきないや 家いも四五軒ご、どれも片側わらわの藁わら葺ぶきを見て通とほると、一軒いっけん荒物あらいもの

屋やらしいの、横縁よこはじの端はじへ、煙草えんそう盆ぼんを持もち出して、六十むそばかりの親お

仁やじが一人。角つぶちの目め金がねで、熟じつと——別べつに見るものはなし、人ひと
おり通もほとんどないので、すぐ分わかつた、鉢お前おきの大きく茂もつた
 南なん天てん燭そくの花を——（実はさぞ目め覚ざまかろう）——悠然として見て
 いた。ほかに、目に着いたものはなかつたのですが……宿しゆくで教え
 られた寺てらの入口いりぐちの竹たけ藪やぶが、ついそこに。……川なは斜ななめに曲まつて、
いわけわし巖いわが嶮あやくなり、道みちも狭せまく、前ゆくて途ては、もう田たん畝ほになります。——そ
 の藪やぶの前の日ひ向なたに、ぼつたら焼やきの荷ひさしに廂ひさしを掛かけたほどな屋や台だいを置
 いて、おお！ここに居ゐる。太たい神しん楽らくが、黒くろ木き綿わたの五いつつ紋もんの着き流なが
 して鳥とり打うち帽ぼうを被かぶつた男おとこと、久く留るめ米めがすり舂すりにセルの袴はかまを裾すそ長ながに穿は流ながし
 た男おとこと、頬ほ杖じょうを突つ合あつて休やすんだのを見みました。端はな初な、夢ゆめに見みた藪やぶ
 にそっくりだ、と妙たがひな氣きがした処ところへ、この太たい神しん楽らくで陽やう氣きになつた。

そのまますれ違つて通つたのです。

向つて、たらたらと上る坂を、可なり引込んで、どつしりした

茅の山門が見えます。一方はその藪畳みで、一方は、ぐつと崖に

窪んで、じとじとした一面の茗荷畑。水溜には杜若

が咲いていました。上り口をちよつと入つた処に、茶の詰襟の服

で、護謨のぼろ靴を穿いて、ぐたぐたのパナマを被つた男が、撥

で掌を敲きながら、用ありそうに立っている。処へ、私が上りか

かると出会がしらに、横溝を跨いで、藪からぬつくりと、頭わ

れたのは、でつぷりと肥つた坊主頭で、鼠木綿を尻高々と端折つ

て、跣足で鋏をついた。……（これがうつくしい伯母さんのため

に出家した甥だと、墨染の袖に、その杜若の花ともあるべき処を）

茗荷みょうがを掴つかみ添そえた、真竹の子の長い奴やつを、五六本ぶら下げてい
ましたが、

(じゃあ、米一升でどうじゃい。)

すぐこう云うと、詰襟が、

(さあ、それですがね。)

(銭、五貫より、その方が割じゃぜい——はっはっはっ。稗ひえまじ
りじやろうが、白米一升、どないにしても七十銭じゃ。割じやろ
がい。はっはっはっ。)

泥足を捏こねながら、肩を揺ゆつて、大きに御機嫌。

給しん金の談判かへあいでした。ずんずん通り抜けて、寺内へ入ると、

正面がずつと高縁たかえんで、障子が閉つて、茅葺かやぶきですが本堂らしい。

左が一段高く、その樹林の中を潜ると、並んではいますが棟が別で、落葉のままに藁が見えます。階を上ると、成程、絵馬が沢山に、正面の明神の額の下に、格子にも、棧にも、女の髪の毛が房々と掛つています。紙で巻いたり、水引で結んだり、で引いて見ましたが、扉は錠が下りています。虹の帳、雲の天蓋の暗い奥に、高く壇をついて、仏壇、厨子らしいのが幕を絞つて見えませんが、すぐに像が拝まれると思つたのは早計でした。第一女神でおいでなさる。まず拝して、絵馬を視て、しばらく居ました。とにかく、厨裡へ案内して、拝見……を願おうと……それにしても、竹の子上人は納所なのかしら、法体した寺男かしら。……

女神の簪の音を、わざとでなく聞こうとして、しばらくうつか

りしたものと見えます。なぜというに、いま、樹立こたちの中を出ますと、高縁の突端とつばしに薄汚れたが白綸子しろりんずの大蒲団おおぶとんを敷込んで、柱を背中に、酒やけの胸はだけで、大胡坐おおあくらを搔かいたのは藪やぶの中の大入道。……納所どころか、当山の大和尚。火鉢を引寄せ、脛すねの前へ、一升徳利を据えて、驚きましたなあ——茶碗酒です。

門内の広庭には、太神楽が、ほかにもう二人。五人と揃って、屋台を取巻いて、立ったり、踞しゃがんだり、中には赤手拭をちよつと頭にのせたのも居て、——これは酒じやない、大土瓶から、茶をがぶがぶ、井ひねたくあんの古沢庵よこかじを横よこ嚙かじりで遣やつてると、破れかかった廚裡くくりの戸口に、霜げた年とつた寺男が手を組んで考えた面つらで居る処。

けたけたけたと、和尚が化ばけわらいらい笑わらを唐突だしぬけに遣ったから、私は肩をすぼめて、山門を出た。

何と、こんな中へ開扉かいひが頼まれますものですか。

なお驚いたのは、前刻さつきの爺さんが同じ処で、まだ熟じつと南天燭なんてんの枝ぶりを見ていた事です。——一度宿へ帰って出直そうとそこま
で引返したのですが、考えました。そちこち午ひるすぎだ、帰れば都合で膳ぜんも出そうし、かたがた面倒だ。一曲か二曲か、太神楽おきまの納るまで、とまた寺の方へ。——

テンドンドン、テケレンと、囃子はやしがはじまる。少し坂を上つて、こう、透すかしますと、向う斜ななめにズツと覗のぞ込きこむ、生垣と、門の工合ぐあいで、赤い頭ばかりが鞆まりのように、ぴよんぴよんと、垣の上へ飛ぶ

のと——柱を前へ乗出した和尚の肩の処が半分見える。いま和尚の肩と、柱の裏の壁らしく暗い間に、世を忍ぶ風情で、※娜なよなよと、それも肩から上ぐらい、あとは和尚の身体からだにかくれた、婦おんなが見えます。

はつと思つた。

髪は艶つやつや々と黒く、色は白いと思うのが、凄すごいほど美しい。

が、近づけません、いや、寄つて行けない。せめて一人、小児こどもでも、そこらに居てくれれば可いいのですが、小学校の声ばかりまた遥はるかに響くんです。私ただ一人……それに食べものが出ている……四十面を下げたものが、そこへ顔が出せますか。

殊いに、佳いい女、と思うほど、ここにうそうそ居て、この顔が見

えよう。覗くのさえ気がさしますから、思切つて、村はずれの田た畝んぼまで、一息に離れました。

蛙がよく鳴いています。その水田の方へ、なわて 畷へ切れて、蛙が、中でも、ことところころ、よく鳴なきしき 頻つてる田のへりへ腰を落とし、ゆっくり煙草を吹かして、まずあの南天老人を極きめました。

——しばらくして、ここを、二人ばかり人が通る。……屋台を崩して、衣装葛籠つづららしいのと一所に、荷車に積んで、三人で、それは畷なわての本道を行います。太神樂も、なかなか大仕掛おおじかけなものですな。私の居た畷なわてへ入つて来たその二人は、紋着もんつきのと、セルの袴はかまで。……田畝の向うに一ひとむら村藁屋が並んでいる、そこへ捷徑ちかみち

をする、……先乗さきのりとか云うんでしよう。

私は、笑いながら、

（お寺の、美人はいかがでした。）

あいて 対手が道化ものだから、このくらいな事は可い、と思った。

（別嬪べっぴん？ お寺に。）

とセルが言うと、

（弁天様があるのかね。）

と紋着きまじめが生真面目です。

私はまごついた。

（いいや、和尚の、かみさんだか、……何ですかね。）

（ははは、御串戲ごしやうだんもんだ。）

(別嬪が居て御覧じろ、米一升のかわりに引攫ひっさらつちまう。)
と笑いながら、さつさと行きまゆす。

はぐらかすとは思えません。——はてな、それでは、いま見たのは。——何にしても太神楽は、もう済んだのですから、すぐに可心寺へ出向く筈はずの処を、少々居迷つたのは、前刻さつきから田の上を、ひよいひよいと行やる蛙連中が、大小——どうもおかしい。……生なりはじめの瓜に似ている。……こんな事はありません。泳ぐ形は、そんなでもないが、ひよんと構えたり、腹を見せて仰向あおもむけに反つた奴などは、そのままです。瓜の嬰あかんぼ児が踊っている。……それに、私は踏込んで見る気はありませんでしたが、この二三枚を除いたほかは、つづく畠で、気のせいか、一面に瓜が造つてあるよ

うです。蛙どもは、ひよんひよんと飛ぶ。すいすい泳ぐ。ばちやりと^は匆ねる。どうもおかしい。そのうちに、隣のじとじとした^す廃りた^たれ^ばた

畑

から、^{あぜ}畝うつりに出て来る蛙を見ると、頭に三筋ばかり長い

髪ひっかの毛を引掛^ひけて曳ひいているのです。おや、また来るのも曳ひい

ている。五六^{びき}疋——八九疋。——こつちの田からも飛込んでまた

引いて出る。すらすらと長い髪じっの毛です。熟みと視みると、水底みなそこに澄

ました蛙は、黒いほどに、一束ねにして被かっいでいます。処々に、

まだこんなおたまじやくしに、^{かみ}蚪かみがけと思うのは、^{みんな}皆、ほぐれた女の髪かみで。

……

女神の堂に、あんなに、ばらみの、たぼみのが有ったのを見ない前だと、これだけでも薄気味が悪かったでしょうのに。——そ

んな気はちつともなかつた——ただ、畝あぜどなりの 糜すたればた 畑ばたをよく
 見ると、畳五枚ばかりの真まんなか中に、焼やきすて棄すての灰が、いっぱい湿つ
 て、淀よどんで、竹の燃えさしが半ば朽ちて、ばらばらに倒れたり、
 埋うもれたりしています。……流ながれかんちよう 灌かん 頂ちよう——虫送り、虫追、風邪
 の神のおくりあと、どれも気味のいいものではない。いや、野墓、
 ——野のさんまい三昧、火葬のあと……悚ぞつ然ぜんとすると同時に、昨ゆうべ夕べの白
 踊子を思い出した。さながらこの蛙に似ている。あつけに取られ
 た時でした。

(やあ——やあ——やあ——)

と山裾の方から、野良声を掛けて、背うしろ後の畝あぜを伝つつて来た、
 鍬くわをさげた爺さんが、

(やあ、お前様めえさまいけましねえ。いけましねえ。)

慌あいさつてて挨拶あいさつした。

(どうも済まない。)

(やあ、はい、詫わびさっしやる事は何にもねえだがね、そこに久しく立っていると瘡ぎやくを煩わづらうだあかな、取憑とっつかれるでな。)

(ええ、どうしてだい。)

(何、お前様。)

と、榛はんの樹から出て来ながら、ひよい、とあとへ飛退とびすきった。

(菜売なうりがそこで焼死やきんだてばよ。)

(焼死やきんだ。)

こつちも退すきった。

(菜売?……ッて)

(おおよ。一昨年おととしずらい。菜売の年増女さ、身体からだあ役に立たなくなつたちで、そこな瓜番小屋へ夜番に出したわ。——我が身で火をつけて、小屋ぐるみ押焦おっこげたあだ。真夜中での、——そんな時は、はい、お月様も赤かつたよ。)

……

九

「……女神じよしんの殿堂の扉の下にやがてひざまず跪いた私は、それから廚裡くりの方へ行こうとしました。

あの——山門を入った正面の高縁の障子が開いたままになって
 いましたから、廚裡へもまわらないで、すぐに廊下を一つ、女神
 堂へ参つたのですが、扉はしまっていました。——

この開扉を頼むのと、もう一つ、急に住職の意を得たい事が出
 来たのです。

唐花からはなの絵天井から、壁、柱へ、綾あやと錦にしきと、薄暗く輝く裡なかに、

他国ではちよつと知りますまい。以前、あのあたりの寺子屋で、

武家も、町家も、妙齡としごろの娘たちが、綺麗な縮緬ちりめんの細工ものを、

神前仏前へ奉獻する習慣ならわしがあつて、裁縫の練習なり、それに手

習ならいのよく出来る祈願だつたと言います。四季の花はもとよりで、

人形の着もの、守袋、巾きんちやく着やくもありましよう、そんなものを一ひ

とすじ
 条の房につないで、柱、天井から掛けるので。祝つて、千成せんなり
ひやくなり百成と言いました。絢爛けんらんな薬玉くすだまを幾条すじも聯つらねたようです。
 城主たちの夫人、姫、奥女中などには金銀珠玉ちりばを鏤めたのも少
 くありません。

女神の前にも、幾条つらなか聯かかつて掛つていた。山の奥の幽なる中に、
 五色つたの蔦おもいを見る思いがあります。ここに、生なりもの、栗みかん、蜜柑、柿、
ざくろ柘榴かぶらなどと、蕪かぶら、人参、花を添つるえた蔓つるの藤豆、小すいかさな西瓜、紫すいの
なすび茄子。色べにたけがいいから紅べにたけ茸なかんなどと、二房一組——色糸てまりの手鞠てまりさえ
 随分糸の乱れたのに、就なかん中なかん、蒼然そうぜんと古色そうぜんを帯さびて、しかも
 精巧ま目を驚あかすのがあつて、——中なに、可愛てのひらい娘の掌てのひらほどの甜瓜まくわ
 が、一ひとつ顆つ。

嬉しくなつて、私が視入みいつた事は申すまでもありますまい。

黄うすあに薄あ藍いの影がさす、藍らん田でんの珠玉とか、柔やわく刻らんで、ほん

のりと暖あたいたかいように見えます、障子越ごしに日が薄く射さすんです。

立つて手を伸ばすと、届く。密そつと手で触ると……動く。……動く瓜の中に、ふと、何かあるんです。」

「——中に——」

筆者は思わず問返した。

「中に何だかあるんです。チリン、チリンと真綿くるに包くまった、微妙な鈴のような音がしました。ああ、女神かんざしの簪かんざしの深秘かんざしに響くといふのは、これだと想つて、私は全身、かツとほてりました。」

ここに聞くものは悚然ぞつとした。

「中は空ろで、きれ仕立ですから、瓜の合せ目は直ぐ分りました。が、これは封のあるも同然。神の料のものなんです。参詣人が勝手にのぞには窺けません。

——真ま先つにこれを一つと思つたんです。もう堂の中に居るのですから、不ぶ躄しに廚裡くりへ向つて、大おな声おは出せません。本堂には祖師の壇があります。ここで呼立てるのも失礼だと思ひますから、入つた高縁の処、畳数を向うへ長く縦に見取つて、奥の方へ、御免下さい、願ひます、願ひます、とやったが一向に通じない。弱つた、和尚、あの勢いきで、寝込みはしないか。廚裡へ行く板戸は閉しまつていて、ふと、壁についた真向うの障子の外へ、何だか、ちらりと人影が射さしたようで、それなり消えましたから……あの美

しい女が。……

あるいは人に隠れたのかも知れない。しかし帰れません。思切
 って、ずかずかと立入って、障子を開けますと、百日紅さるすべりが、ち
 らちらと咲いている。ここを右へ、折れ曲りになつて、七八間、
 廂ひさしはあるが、囿かこいのない、吹抜けの橋廊下が見えます。暗い奥に、
 庵いおりが一つ。背後うしろは森で、すぐに、そこに、墓かみが、卒塔婆そとばが、と見
 る目と一所に、庵の小窓に、少し乱れた円まるまげ髻まげの顔のぞが覗いて、白
 々と、ああ、藤の花が散り澄ますと思う、窓下の葉蘭はらんに沈んで、
 水の装もりあが上つた水盤みづいに映つたのは、撫なでがた肩なびの靡なびいた浴衣の薄い模様
 です。襟えりうらに紅あかいのがちらりと覗いて、よりかかった状さまに頬杖
 して半ねむば睡ねむるようになっています。ああ、寝着ねまきで居る……あの裾

の下に、酒くさい大坊主が踏反ふんぞつて。……

私は慇懃いんぎんに礼をしました。

瞳を上げる、鼻筋が冷く通つて、片頬かたほにはらはらとかかる、軽
いおくれ毛を撫でながら、静しずかに扉かひらきを出ました。水盤の前に、寂し
く立つ。黒縹くろじゆす子と打合せらしい帯を緩くして、……しかし寝て
いたのではありません。迎えるように、こつちから橋に進んで—
—象嵌ぞうがんなどを職にします——話して、瓜の事を頼みました。

やさしい声で、

(和尚様は留守でございます。けれど、明神様へ……私から。)

(是非どうぞ。)

前刻さつきは、あの柱の蔭に、と思つて、

（太神樂はいかがでした。）

（まあ、違いますよ、私は見はいたしません。）

（ええ、それでは。）

（明神様の御像おすがたを、和尚さんが抱いて出たのでございます。お慰みに、と云つて、私は出はいたしません。明神様も、御迷惑だつたでしょう。）

（貴女あなたは。）

（私は可厭いやですわ——それに御厄介になつております居候なんですから。）

瓜の中が解つたら、あるいはこの意味も、どうした事か、解るかも知れない。

(これでございますね。)

御厨子の前に、深く蠟燭ろうそくを点じ、捧げて後のち、女は紅くれないの総ふさぎに手を掛けた。燈あかしをうけると、その姿は濃くなつた。

(よく出来ていますこと。)

(ああ、そうして取れますか。)

自分の顔の蒼あおくなるまで、女のさしのばした雪白かいなの腕うでに、やや差寄つて言いました。

(畠はたけのだと、貴方あなたの方が取るのがお上手でしようけれど……)
微笑にっこりする。

(ええ。)

(これは、この蔓つるの結びめで解ほどけます。私わたしなぞも、真似まねをして拵こしら

えましたから存じております。——まあ、あなた貴女が。)

と云つて、廚子を拝んで、

(お氣にめして、時々お持ち遊ばすそうで、ちつとも埃ほこりがついて
いません。——あすこへ……明るい処へ参りましょう。お仕事の
事で御覧になりますなら、その方がよく見えます。)

消えるようになって、すらすらと出ました、障子際へ。明ける
と、荒れたが、庭づくりで、石の崩れた、古い大な池が、すぐこ
の濡縁はすに近く、蓮は浮葉を敷き、かきつばた杜若は葉がくれに咲いてい
る。……御堂の外格子——あの、前刻階さつきごはしから差覗さしのぞいた処はただ、
黒髪の暗い簾すだれだったんですがな。

(どうぞ、あなた貴女が明けて——お見せ下さい。)

さし向った、その膝に近づきました。

(お菓子でしようか、よく合っておりませうこと。)

私へ、斜めに、瓜を重いように、しなやかに取って、据えて、二つに分けると、魚がひとつ一尾、きらりと光り、チンチンチンとうろこ鱗が鳴るとひと齊しく、ひらりと池の水へ落ちました。

あ、あ、あ、あの池の向うの、おおき大な松の幹を、ゆいわた結綿の娘と、おりかさな折かすり重ひとえって、かすり紺ひとえの単衣の少年が這っている。こつちで、ひとと女に寄ろうとする、私の膝が石のようにしびれたと思うと、むこう対向で松の幹を、少年がずるずるとすべこつて落ちた。

落ちると同時に、その向うの縁に、旅の男が、まるまげ円鬚の麗人と向合っているの見える。

そこには、瓜が二つに割れて、ここの松の空なる枝には、緋鹿ひが子の輪のこが掛かかりました。……御堂も、池も、ぐるぐると廻まわったんです。

見る見る野の末に黒雲がかかると、黒髪の影の池の中で、一つ、かたかたと鳴くに連れて、あたりの蛙のいっとき一齊いっせきに、声を合わせるのが、

松の根本いちごに苺いちごが見える……………

あの当時ときの唄うたにそのままです。

飛びついて抱かかこうとする手が硬こわばつて動かない。化鳥けちようのごとく飛びかかった、緋しの扱し帯きを空くうに掴つかんで、自分の咽喉のどを縊しめようとするのを、じつと押おさえて留とどめました。女の袖が肩を抱くと、さ

し寄せた頬にかかつておくれ毛が、ゆれて、靡なびいて、そこいらの、
みの毛ばら毛、髭かもしも一所に、あたりは真暗まつくらになりました。

(連れてつて下さい、お優さん、冥途めいどへでもどこへでも。)

(お帰りなさい——私が一所に参りますから。)

その時、甘い露に……唇が濡れました。息を返したんです。大
笹の宿の亭主が、余り帰りの遅いのを見に来て、花桶はなおけの水を灌そそ
いだんだそうです。

(……私が一所に参りますから。)

で、——お優さんは、この炬燵こたつの、ここに居ます。」

筆者は炬燵から飛とびしさった。

「しかし、この頃に、大笹へ参つて、骨を拾つて帰ろうと思ひます。

あの時、農家の爺さんが（菜売）の年増女だと、言つたでしよう。瓜番の小屋へ自分で火をつけたのは尋常ただごととは思ひなかつたが。……ただ菜売とだけ存じました。——この頃土地の人に聞くと、それは、夏場だけ、よそから来て、肉みを売る女の事だと言います。それだと、お優さんの、骨は、可心寺の無縁ですから。」

附記。

その後、大笹から音信たよりがあつた——（知人はその行を危あやぶんだが、小山夏吉は日を措おかず能登へ立つた）——錦の影であろう、廚子ずしにはじめて神像を見た時は、薄い桃色に映つた、実は胡粉ごふんだそう

である、等身の女神像は肩に白い蓑みのを掛けて、それが羽衣に拝ま
 れる。裳もすそを据えた大魚は、やや面つらが奇怪で、鯉ますだか、鱒ますだか、亀
 だか、蛇だか、人間の顔だか分らない。魚尾は波がしらに芻はねて
 いる。黒髪かんざしの簪かんざしに、小さな黄金きんの鮒ふなが飾つてある。時に鏘しょう々しょう
 として響くのはこの音で、女神くしけずが梳くしけずると、また更あらためて、人に聞い
 た——それに、この像には、起居たちいがある。たとえば扉の帳をとぎ
 す、その時、誦ずき経きょう者しやの手に従したがうて、像の丈の隠るるに連れて、
 魚の背に膝ひざが着くというのである。が、小山夏吉の目にも、同じ
 場合にその氣勢けいはいを感じた。波を枕まくらに、肱ひじ枕まくらをさるるであらう。
 蓑の白い袖が時として、垂たれて錦きん帳ちやうをこぼれなどする。
 不思議な発ばね条じ掛かけがあるのではないか、と言う。

まこと
 実や、文化よりして、慶応の頃まで生存した、加賀大野港おおのみなとに
 一代の怪人、工匠にして科学者であつた。——町人だから姓はな
 い、大野浜の弁吉の作だそうである。

三味線さみせんただ一挺ちようを携えていずこよりもなく浜づたいに流れて
 来て、大野の浜に留とどまつた。しきりに城下を往来したが、医をよ
 くし、巫術ふじゆつ、火術を知り、その頃にして、人に写真を示した。
 製図たくみに巧たくみに、機械くわに精くわしい。醬油のエッセンスにて火を灯ともし、草
 と砂糖を調じて鉷山用のドンドロを合せたなどは、ほんの人寄せ
 の前芸に過ぎない。その技工の妙を伝聞して、当時の藩主の命じ
 て刻ましめた、美しき小人の木彫は、坐容立礼、進退を自由にし
 た。余りにその活いきたるがごとく、目に微笑をさえ含んで、澄ま

し返った小憎らしさに、藩主が扇子をもつてポンと一つ頭を打つや、颯と立つて、据腰に、やにわに小刀に手を掛けて、百萬石をのけ反らした。ちよつと弁吉の悪戯だといふのである。三聖酔をなむる図を浮彫にした如意がある。見ると、髯も、眉も浮出ているが手を触ると、何にもない、木理滑かなること白膏のごとし。——その理、測るべからず。密に西洋に往来することを知つて、渠を憚るものは切支丹だとささやいた。

——鳶（鶴ではない）を造つて乗つて、二階から飛んでその行く処を知らない。

好んで、風人と交つたから、——可心は、この怪工に知を得て、女神の像は成つたのである。

また希有^{けぶ}なのは、このあたり（大笹）では、蛙が、女神にささげ物の、みの、髻^{かもし}を授けると、小さな河童^{かっぱ}の形になる。しかしてあるものは妖艶^{ようえん}な少女に化ける。裸体に蓑をかけたのが、玉を編^{まと}んで纏^{まと}ったようで、人の目には羅^{うすもの}に似て透いて肉が甘い。脚は脛^{はざ}のあたりまでほとんどあらわである。月朧^{おぼろ}に、燈くらき夜^よなど、高浜、あべ屋、福浦のあたりまで、少からず男を悩すといふのである。

小山夏吉の手紙は、この意味を——

「おもいの外、瓜吉（渾名^{あだな}をいう）は暢気^{のんき}だぜ。」
皆云つていたが、小山夏吉は帰らない。

なお手紙によると、再び可心寺に詣でた時は、和尚は、あれから直に亡くなつて、檀を開くのに、村の人たちが立会つた。——無住だつた——というから。

お優さんの骨——ばかりでなく、靈に添つて、奥の庵を畠に、瓜を造つているのだらう。本懐であらう。

蛙の唄をききながら、その化けた不良性らしい彼の女等を眷属にして。……

あとでも、時々、瓜は市場に出た。が、今は他のものを装る器具でない。瓜はそのまま天来の瓜である。従つて名実ともに鑿は冴えた、とその道のもの云つた。が惜しいかな——去年の冬、厳寒に身を疼んで、血を略いて、雪に紅の瓜を刻んだ。

昭和二（一九二七）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、以下の個所を除いて大振りにつくっています。

「三《みつ》ケ口」「一ヶ処」

2011年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河伯令嬢

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>